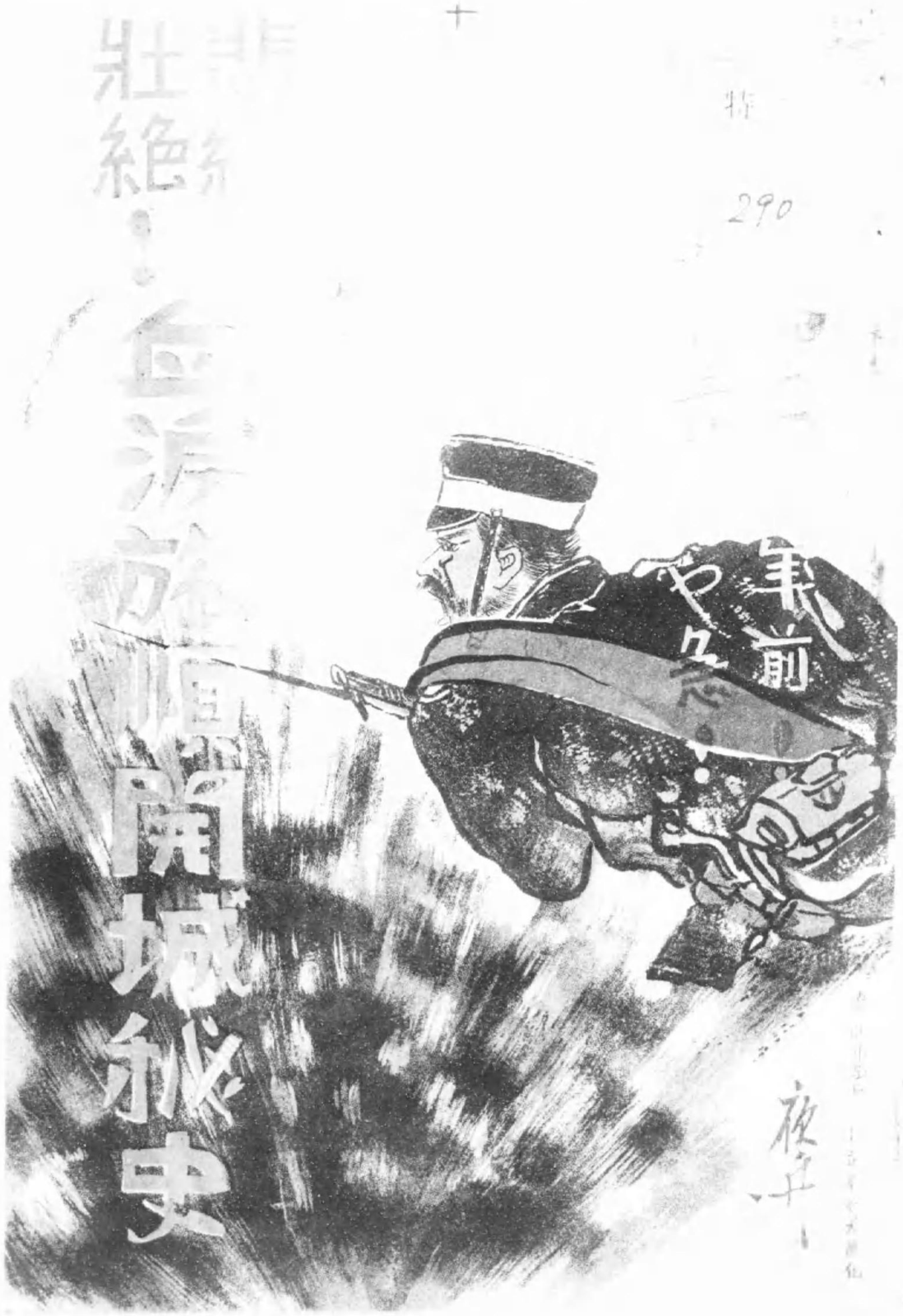
特214
290

始


壯絶！
仁浜高
陸軍閉城秘史
東京前
夜叉

特214
290

忘れるな！三十年前!!（明治三十八年一月一日旅順開城三十週年紀念出版！）

悲絶！
壯絶！

血涙旅順開城秘史

日露の風雲今や急！

東京 漫畫時代社發行

帝大治明の日しせましま

旅順開城直後の乃木大將とその邸宅

乃木陸軍大將の邸宅は赤坂區新坂町にあり（現乃木神社）圖は明治三十八年一月三日の撮影にして是れ正に旅順の敵將降つて、歡呼の聲全國に湧く時なり。四ツ目菱は乃木家の定紋なり。下は乃木大將邸の門前

陣中の大山大將

旅順開城直後の東郷大將とその邸宅

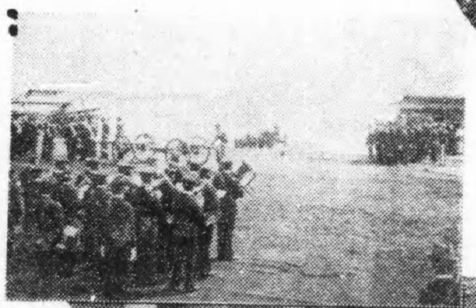
東郷大將邸は麹町區上六番町にあり圖は明治三十八年一月三日の撮影にして、大將敵艦隊を殲滅して東京に凱旋せられ、門前の賀客綿々として絶えざりしなり。丸に蔦は東郷家の定紋なり。

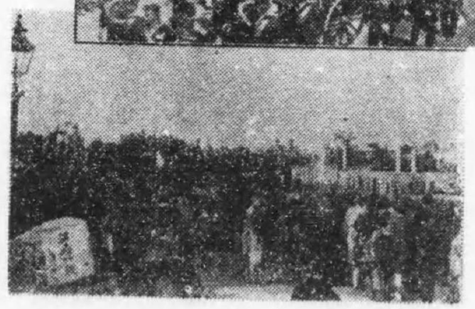
下は大將邸の門前（現東郷元帥邸）

在りし日の廣瀬中佐

廣瀬中佐の一死、天下萬衆をして哀悼を禁ぜざらしむ。
下圖は四月十三日葬儀の景

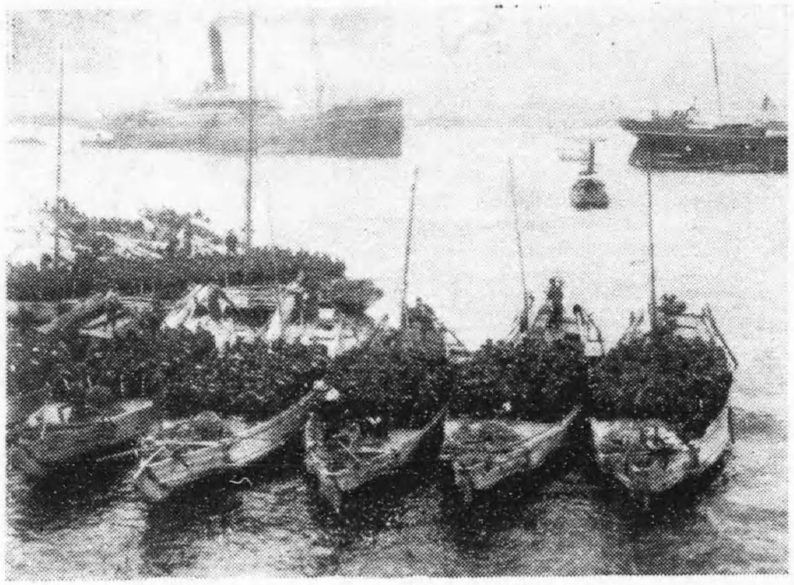
廣瀬中佐の葬儀



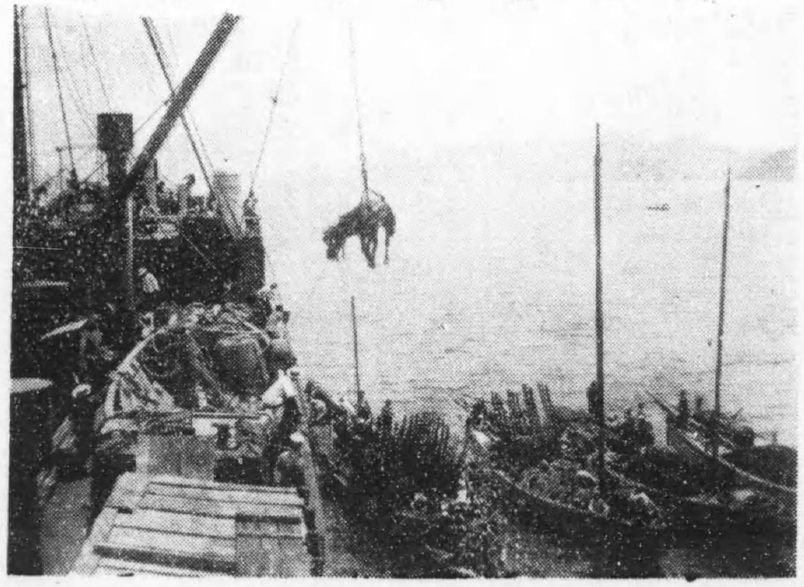


上は——禮柩佐世保上陸
中は——砲車臺上の靈柩
下は——青山墓地の葬場

騎露を征すべく皇軍宇品港出發の光景



軍馬積込みの光景



兩將軍水師營の會見

是れ一月五日水師營に於ける兩將軍及び其の幕僚食後の撮影にして、乃木將軍、第二列に向つて右端は伊知地少將、次は津野田參謀大尉、左はニエヤルスコエ副官、第一列右列右より渡邊少佐、松平大尉、安原大尉、マルチエンコ中尉、川上領事館書記官なり。

忘れるな！　三十年前！

悲絶！壯絶！　血涙旅順開城秘史（目次）

松波治郎著

旅順勸降使山岡少佐……一七
二百三高地の占領……二一
敵の降伏と我が軍の俠氣……二五
開城談判と調印……二八
その夜の晩餐……三五
おゝ！水師營の會見……四〇
ステッセル將軍と馬……四七
敗軍の將兵を語る……五一
白襷決死隊の華……五五

決死隊から脱け出た兵士は？……五八
死の直前の孝心……六二
乃木將軍と孝行兵士……六六
旅順閉塞の計畫……七〇
第一回の閉塞隊……七三
軍神廣瀬中佐の生ひ立ち……七八
廣瀬中佐と財部大將……八三
廣瀬中佐の柔道……八五
露國の「戻り橋」……八八
打ち明ける祕報……九四
愛國の志士コシュースコ……九八
軍神廣瀬中佐の戀人……一〇一
勿體ない手袋……一〇三
おゝ！正しく神の姿……一〇八
第二回閉塞隊の壯舉……一一二
杉野兵曹長は何處……一一七
廣瀬中佐の最後……一二一
廣瀬中佐の遺骸……一二九
悲報頻りに到る……一二六
常陸丸最後の軍歌……一三〇
快哉！上村將軍健在……一三五
麻布第一聯隊の旗手……一三八
憶へ！皇國の人柱……一四一
表紙……陸軍歩兵少佐　武藤夜舟畫伯

旅順陥落の歌

（一）祝へや祝へ　　敵將降りて要塞陥ちぬ
一月一日　　めでたきこの日

（二）祝へや祝へ　　難攻不落の旅順の城に
けふ日も輝く　　朝日の御旗

旅順勸降使山岡少佐

おゝ！　憶ひ起せ、數へて三十年前の一月一日。

燦然たる太陽は、日本大帝國のシンボルであつた。

明治三十八年の一月元旦、忘れてはならない旅順開城のその日！

難攻不落と世界的に評價された、あの旅順の要塞も、畏れ多くも　大元帥陛下の御稜威と我が忠勇義烈な將士の前には、遂に開城の他はなかつたのだ。

が、何と云ふ博大な御仁慈であらせられるであらう、既に、旅順の總攻撃の前に、陛下には旅順口要塞内の非戰鬪員を憐れと思召され、救ひ出す爲めに大命を下された。

それで、軍使として軍參謀砲兵少佐山岡熊治氏が一行を率ゐて水師營附近に行き露國の前哨中隊長ミシューラ大尉に面會した。

ミシューラ大尉は來使の旨を白玉山下の要塞司令部に通じた後で着て居た外套を地上に布いた

「さ、どうぞ」

で、山岡參謀は着座したが、ポケットからブランデーを拔いて、
「一杯どうです」
「や、どうも、軍使には、こちらで御馳走せねばなりませんが、却つて美酒の御饗應を受けて恐縮ですな、こつちには何にもないんで――」
「いーや、これが、あべこべになつて、若し貴下が軍使として來られる時があつたら、その時御馳走になるから同じことさ」
「ど、どう致しまして、そんなことは夢にもありませんよ、はゝゝゝ」
ミシューラ大尉は淋しく笑つて、
「どうも、前哨勤務と云ふのは厭ですなあ、こつちへ來て三十日、砲聲が、がん〳〵して夜も眠れませんよ、不愉快千萬です」
と、こぼした。
山岡參謀は、につこり笑つて、
「いや、僕の方は、貴軍が、砲彈を惜しみなく、どか〳〵發砲されるので、何だか一種の音樂を

聽くやうですな、頗る愉快ですよ」
と云つた、そして、
「どうです、旅順では面白い生活をされたでせう」
「どう致しまして、旅順なんか、すつかり變つてしまひましたよ、女も俳優も逃げてしまつたんで、芝居だつて觀られやしないし、女とダンスなんか出來やしないんですぜ」
とミシューラ大尉、不平をこぼした。
露國側の其の時の返事は、有り難い聖旨も勸降も、應じ難いと生意氣なことを云つて來た。
それはクロパトキン將軍が、
「旅順は世界のどんな强國を敵としたつて、三年は悠々持ち堪へられる」
と傲語して居たからだ。
どうだ、それが三年處か、一年も、いーや半歲も經たぬ間に、べちやんこになつてしまつた。
もつとも、其間の壯烈義烈、盡忠の我が軍の將士の行動は、たゞ〳〵涙であるが――。
そして、乃木大將の指揮した第三軍は、第一回の旅順總攻擊を八月十九日に行つた。正面攻擊

三晝夜、流石に難攻不落と稱するだけに、僅かに外防の一部を拔いたゞけで我が軍の死傷は一萬に及んだのだ。

が屈しない、我軍は正攻法で九月十九日に第二回の總攻擊をやり、直ちに敵の中堅に迫つた。遂に肉薄戰、石を拾つて投げ合ふ迄の激戰だ。そして、漸く鉢卷山堡壘及びP堡壘を占領して各砲臺と要塞の內部に大損害を與へたが、まだ中堅を拔くことは出來なかつた。

しかも、その時、敵の太平洋第二艦隊は、既にバルチック海を出發して東洋に向つて居るのだ我が軍としては速かに港內の敵艦を全滅して、浦鹽斯德艦隊と合するのを防がねばならない。

其處で、我が將士は大和魂の發揮は實に玆にある！　として、みんな死を決して第三回總攻擊に取りかゝつた。正に十月二十五日、十一月三日の天長節には旅順で祝杯を擧げやうと、勇猛邁進、中村覺少將は豫てから

我れ死ねば鬼ともなりて戰はむ
かばねはくさのむすにまかせて

と、切齒扼腕の歌を詠んで居つたが、此の時、特別豫備隊を率ゐて、白襷十字に綾つた、白襷決死隊を組織し、要塞內に突入したが、悲しいかな殆んど全滅、中村少將は泣いて

己が身はさもあらばあれ謀
ならざりしこそうらみなりけり

と一首を詠じ、傷いた身を第一師團の野戰病院に收容された。

其處で二十七日から港內の船艦を直射するに便利な二百三高地を奪ひ取らうとしたのだ。

二百三高地の占領

二百三高地は名の如く二百三米突ある旅順背後の一番高い山、これを奪つてしまへば、旅順の敵は、もう袋の鼠だ。

しかし、これが難事中の難事だ、だから、松村將軍は、九月十九日から四日間も突擊したが多數の兵士を犧牲にしたゞけで拔くことが出來ない。で、新手を加へて十一月二十七日から、どうしても占領せにやならぬと、猛襲、强襲の限りを盡した。

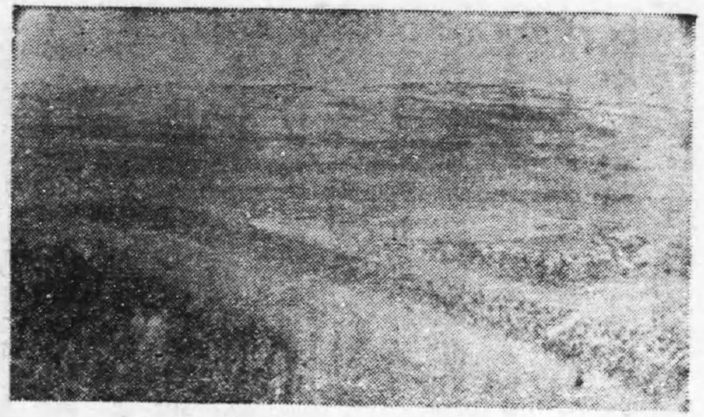
先づ、砲兵隊が盛んに砲彈を食はせて、その煙が山を包んだ頃に、突擊隊が、どつ、と鬨を作

つて山上に攻め登る、そして此の高地と海鼠山との間の赤坂山へも、わつ、と突撃！

西と南の側面から友安少將の部隊が向ひ、西北の側面は馬場少將が丹精こめて堀り上げた攻路を傳つて砲臺の麓まで進んで、鐵條網を切斷し、鹿砦を破壞して、まつしぐらに、攻め入らうとすると、敵の機關砲が、ばらばらばらつ、と雨のやうに降り注ぎ、太陽溝、鴨湖嘴、老鐵山の諸砲臺から、どかん〳〵と盛んに砲彈を飛ばして、我が兵士の頭上に湯でも浴せるやうな有樣、無念！　ばたり〳〵と倒れて、全滅した中隊は、どの位あつたか知れなかつた。

續いて二十八日、第七師團の大迫將軍も、新たに部下を率ゐて攻擊に加つたが、敵、なか〳〵頑强だ。うまい工合に一方を突き破つて、山の頂に登つたかと思ふと、忽ち他の砲臺から十文字に交錯して打つ放して來るので其の苦戰は一方でなく、友安、馬場の兩少將も、自ら戰線に出て士卒を勵ましたが、いけない。

二十九日も慘憺たる苦戰をやり、三十日の夜だ、友安部隊の香月中佐が村上大佐と相應じて、最も猛烈な襲擊をやり、とうどう、午後十時辛くも此の險要な地を占領したが、お隣りの赤坂山の方では、奪つては奪ひ還され、奪つては奪ひ還されしてゐた。



二〇三高地ヨリ敵陣展望

さて、その夜も更けて、風腥ぐさく、十二月一日の午前一時三十分頃になると　敵の增援兵が六百ばかり、左手に銃を持ち、右手に爆藥を提げ乍ら、めちやくちやに逆襲して來たので、忽ち大激戰となり、新たに加はつた齋藤少將の一隊も力を協せて防いだが、其の間に、村上大佐の隊は幹部が殆んど全滅して、夜の明ける頃までには、殘るもの僅かに四十人。

味方は後方部との連絡を失つた、彈丸は盡きた、飲む水は無い、仕方がない、友安少將は涙を呑んで、此所を棄て、退却した。

しかし、何と云つても連日の激戰だ、敵も味方も死傷が夥しく、屍は山を掩つてしまつて居るのだ、其處で双方相談して、戰鬪を一時中止して、死體の收容と隊伍の整理

とに三日かゝり、その間に英氣も恢復したので、更に十二月五日、再び突擊した、この時は齋藤少將が友安少將に代り、吉田少將と兩手に別れて新手の精兵で獅子奮迅の勢で、突擊したので、流石の敵も、とうどう參つてしまつて二百三高地の頂上高く日章旗は飜つた。

が、二百三高地こそは正に屍山血河、わが同胞の骨で埋まつて居るのだ。これを鐵血山と呼び乃木大將が

爾靈山險豈難攀
男子功名期克難
鐵血覆山山形改
萬人齊仰爾靈山

と一詩を賦して、爾靈山と稱されたのも、まことに故あるかなで、此の戰鬪に、敵の豪將コンドラチエンコ將軍は、

「余等は戰爭して居るのではない、露國魂と日本魂との優劣を實驗しつゝあるのだ」

と云つた、その露國魂を、敢然として征服したのだ。この肉彈戰、この白兵戰、瞑目して、われ等の鑑たる爾靈山に眠る勇士に深甚なる感謝と瞑福とを祈らざるを得ない。

敵の降伏と我が軍の俠氣

陣中の兒玉大將

いよ〳〵二百三高地は占領した、我が軍は直ちに本防禦線の各砲臺の攻擊に移り、十二月十八日には東鷄冠山北砲臺を爆破、同二十八日に二龍山砲臺を爆破し、三十一日には松樹山を爆破した。

かうなつたら占めたもの、望臺一圓は我が軍のものだ、そして旅順舊市街に突入する道は開いた。

敵は、遂に自ら東鷄冠山の南砲臺を爆破してステツセル將軍は、麗かな明治三十八年一月一

日、軍使に降參の手書を以て來させた。

それには

「貴軍連日の攻擊に囚り、今や人道の大義に鑑みて、此の要塞を支持するの不要なるを認むるを以て開城に關する交涉委員を派遣せられたし」

とあつた。

人道を云々するならば、御仁慈の聖旨を傳達した時に云ふべしだつた。さりとは曳かれものの小唄である。

人道と云へば、日本武士の情こそ誠に感嘆すべきだ。

我が軍の兵士は、露國の俘虜の服の破れを縫つてやつた。そして、病氣を看護し、湯茶をやり燃料を供し、搔ゆい處へ手の屆くやうな待遇をした。そればかりではない、一日の午後、敵軍使が我が軍へ來ると、敵兵は、我が前線に集つて降參して來るものが多かつた。

しかし、その時は、まだ我が軍が開城降伏を承認して居ないので、他日本國へ還送される時には臆病者として軍法會議に附せられなければならぬ。

で、我が軍の兵士は、

「降參するのは、も勘し待て、いま兩軍交涉中だから、開城承認となると、君達は開城兵として自由な行動が出來るのだから、その方がいゝぞ」

と、降參したのを又、放還したりした。何と云ふ事を辨まへた武士道の美くしさだらう。

だが、此の榮冠の影には乃木大將は無論の事、參謀總長兒玉大將の苦心は一方でなかつた。

兒玉大將は福島其他の幕僚を率ゐて、十二月一日、高崎山へやつて來て、乃木大將と共に壬窟に入つて、松村將軍の寢臺に這入つて寢ることになつた。

その部屋と云ふのが僅か一坪半位、乃木大將と兒玉大將とは、頭と足とを互ひ違ひにして寢たものだ、晩食の時に酒を――と考へた部下があつたが兩將軍とも、此の時は一滴も口にせず、本當に不眠不休、寢食を忘れて苦心したのだ。

後に兒玉大將は思ひ出して云つた。

「あの二百三高地の攻擊は兵士も苦心したが我輩達も苦心した。乃木と我輩とが、一枚の毛布を敷き合つて、やつと假寢の夢を結んださ、處が乃木の尻は我輩の面に來て居る、しかも彼れ善く

「屁をひつて我輩實に苦境に陥つた」

と笑はれたさうだが、僕等は、その話を聞いても笑へない。

土窟に一枚の毛布を敷き合つて寢る兩大將、その戰場の不便と困苦が、犇々と胸を打つからだしかも、

旅順の十二月だ、寒氣の凜烈は云ふ迄もない、

思へば、「寒い〳〵」などゝの弱音は、容易に吐けるものではないのだ。

開城談判と調印

光輝ある三十年前の一月元旦、開城降伏使の來る直前の、軍神乃木將軍の樣子は——。

既に、戰勝〳〵の報は引續いて來た。

副官室では兼松大尉（習吉氏）が

新玉の年のはじめにいかつちの

音もめでたきかちときの聲

貿易事務官川上俊彥氏 夫人と令孃

伊地知少將

の祝詠をしたが、乃木大將は部下や來訪の江森從軍記者其他に盃をさして、

「新年めでたい、陣中で何の設備もないが、昨日、偶々横濱小學校の生徒から、屠蘇を寄送して來たから、諸君と國運の無窮を祝すのには、一倍の快感がある」

と云つて、小國民の至誠からの屠蘇に、からすみを添えて、感激の中に祝杯を擧げたのであつた。

其の日の午後六時、敵將ステツセルは請降書を寄せた

軍司令部では、直ちに參謀會議を開いて、開城受取の手續を定めて、陸軍委員として伊地知幸介少將、海軍委員として第一艦隊參謀官岩村團次郎中佐、これに若干の參謀官及び文官を隨行させることゝして、二日正午水師營で談判する旨の返書を作つて、山岡參謀、河津通譯の

二人が持つて、二日の午前二時、軍司令部を出發、九時に、敵の前哨線に到着して交代した。

再び思へ！　當時の乃木將軍の心事を。

山川草木轉荒涼
十里風腥新戰場
征馬不前不語人
錦州城外立斜陽

と賦した頃の焦慮、今、酬ひられて、榮光は新春の光と共に一身に浴びて居るのだ。

と、同時に、此の喜びを知らすに由ない、地下の勇士を憶ふて、心中、うたゝ、涙せきあへなかつたらう。

明くれば一月二日、今日こそ水師營での開城談判だ。

其處は、我が衛生隊の收容所であつた一民屋、砲彈の爲めに殆んど形を崩された水師營の家屋の中で、稍々完全な一軒であつた。

收容してあつた患者を他へ移して、會見室、日本委員控所、それから露國委員控所とし、臨時の事で、行き屆かなかつたが、ともかくに三室に椅子、卓子を備へて暖爐を据え、土間を堀つて木炭を焚いて室内の温度を保ち、日本委員の控所には軍司令部に直通する電話を架けた。

日本委員の一行は二日の午前十時に司令部を出發して正午前に水師營に着いた。しばらくすると敵の軍使の一行が、みんな馬に乘つてやつて來た。

それで山岡參謀は、前哨線迄出て迎えた。

そして、昨日まで苦心して作つた土囊の塹壕の一部分を切り開いた道、其處から、敵の委員を案内して、一休憩した後、いよ〳〵第一會見となつた。

居並ぶ我が軍の委員は伊地知少將、岩村中佐、隨行の山岡參謀、津野田參謀、有賀長雄氏　篠田法學士、兵藤編修、河津、鎌田の兩通譯。

敵軍の席には關東要塞地區參謀長ライス大佐、同參謀マルチエンコ中尉、レトウヰザン艦長セスノウイッチ大佐、赤十字社理事パラショフ將軍、要塞參謀長フボストフ中佐、第四師團參謀長ドミツレブスキー中佐、第四師團參謀ゴロブネ大尉が、ずらりと居並んだ。

先づ握手。

それから挨拶。

次に、伊地知少將はライス大佐と岩村參謀はセンノウィッチ大佐と各々全權委任狀を交換した

そして、日本委員から開城規約案及び附錄案を交付した。これは實に敵を愛するの寛大なものであつた。その上、研究の爲めに一時間の猶豫を露國側に與へた。それで兩國委員は、それ〴〵控所へ退いた。

二時三十分第二次會見をして、更に午後三時五十四分に第三次會見をしたが、此の談判の中途で軍司令部から電話があつた。

「右翼方面の露兵は群をなして投降し、旅順市街に火災が起り、騷擾の模樣である」

と云つて來た。其處で、ライス大佐に告げると、大佐は、

「談判が、こんなに進行したからは、兩軍とも、直ぐに戰鬪行爲を休止してもいゝと思ひます、自分は直ぐにステッセル將軍に電報したいから、貴軍で、その手續を執つて下さい」

と云つた。

で、即ち談判は成立した。露軍は急傳騎を直ぐに旅順に飛ばせた。我軍も軍司令部から各部隊に命令を發した。

又、將校や官吏の宣誓解放は、敵軍は、露國皇帝の勅許がなければ宣誓出來ぬと云ふので電報の取次を賴んだから、我が軍は承諾して、

「返電が來て宣誓される迄は皆俘虜としなければならないから、それは御承知ありたい、若し返電が遲れたなら日本へ後送した後に宣誓することになるかも知れんから、これも併せて申し上げて置く」

と答へた處、露軍側は、

「結構です」

と承知した。そして、

「將校に愛馬一頭づゝを携へて行つてはいけませんか」

「それは前例がありませんね、駄目です」

「宣誓した從卒一人づゝ引連れて行きたいのですが——」

「露國將校は從卒なしで一日も暮せないと云ふ話だから、それは許しませう」

「も一つお願ひがあるのですが、將校の携帶行李ですな、あれも原案には日本將校の携帶行李相當の分量とありますが、これは遠い處なので必要品が多いのです、これは、どうしても増して頂きたいのですが――」

「宜しい、事情に依つては相當に斟酌しませう」

其處で、談判が終つたのは午後四時三十分。

「晩餐を一緒にやりませう」

と約束して、一旦双方とも控所へ退いて、有賀長雄氏と津野田參謀とは原案の修正に着手してそれから英文原本の淨書に取りかゝり、先づ、開城規約の正本一通を作つて、それを兩國委員に送り、同樣の正本一通を淨寫するやうにと、こちらから要求した時、ライス大佐はマルチエンコ參謀に云ひつけて、正本を謄寫させた。

そして、双方共二通の正本が出來たから、有賀長雄氏とマルチエンコ參謀とが間違ひがないか調べ合せて後、調印は終つた。

その夜の晩餐

十時から、いよ〳〵晩餐を一緒にするのだ。これは、我軍が御馳走をしてやつた。

もう、戰爭――此の旅順だけは片付いたのだ。ほつ、と肩の荷を下ろして露國委員は、さも愉快さうに酒を飲んだ。

此の時、參謀長伊地知少將は、ライス大佐に向つて、

「どうです、腹が減つたでせう」

ライス大佐は頷いて、

「何しろ、昨夜一睡もしませんでしたから、それに、今朝六時に、お茶を喫んだばかりです」

「私も同樣です、昨夜も寢ず、午前九時に茶を啜つたゞけです」

伊地知少將、につこり答へて、

「旅順ぢや、食物はどうでした」

「食物は十分ありましたが、野菜のなくなつたのには閉口しましたよ、その爲めに一種の病氣が

出ましてね、御覽下さい、こんなんです」
ライス大佐は齒ぐきを指して見せた。
「水はどうでした？」
「飲用水は不足しませんでしたよ、內部に水源がありますから、それに淨水機を運轉して居ますので——」
「一體、旅順口全體の人口はどの位です？」
すると、横から、マルチエンコ中尉が、
「支那人を合せて約三萬五千人でせう」
と答へた。
「外國人は？」
「居りますよ、みんな商人で、フランス人ドイツ人が多いです」
伊地知少將は頷いて、
「病兵は今、どの位の數です？」

それにはパラショフ將軍が答へた。
「各病室に居るものが約一萬四千人あります」
するとライス大佐が、續いて、
「兵營內のものを合せると二萬人以上ありますな、そればかりぢやないです、何と云つても日本軍の猛擊ですから、晝夜を別たず勤務して居て交替しないので神經に異狀を來すものが日々五六十人づゝ增えて行きます、これが開城に決した一つの原因でもあるのです」
「さうですか」
と云つて伊地知少將、話題を換へた。
「ステッセル將軍は健康ですか？」
「は」
ライス大佐、簡單に答へた。
「何處に住んで居られるのです」
「舊市街です」

「フォーク將軍は？」
「は、健在です」
それで伊地知少將は、
「海軍提督は幾人です？」
セスノウイッチ大佐が、伊地知少將の方に向つて、
「四人ですよ、軍艦の數より多いです」
と答へると、
「はつはつはつ」
伊地知少將思はず笑つた。一座が、それに續いて笑ひ崩れた。
會食が終る頃になつて、今迄笑つた居たライス大佐は、嚴肅な顔で、伊地知少將に握手を求め
「會食の第一にお話のありました、今日乃木將軍は　天皇陛下から、ステッセル將軍の武勇を嘉賞せられ、名譽を以つて待遇せよとの優渥な電報を御受けなさつたとのことは、ステッセル將軍聞いて、どれほど感激するかも知れません。ステッセル將軍に代つて、厚く御禮を申上げます」

と頭を下げた。
それで、伊地知少將は、
「乃木大將とステッセル將軍と會見されるといゝと思ひます、ステッセル將軍の名譽を傷けず、感情を害しない方法で、實行するつもりですが、どうです」
「結構です」
ライス大佐は、はつきりと答へた。
そして別れを告げて行く露國委員の爲めに、我が軍は兵隊に前哨線まで護送させた。
――が、此の會見半ばに、旅順の騷擾が報告されたのは、二日の朝、軍使が出て行くと同時に旅順では、
「兵隊だけは日本へ渡すさうだ」
と云ふ噂が、何處からともなく出て、ぱつ、と廣まつてしまつたのだ。
さあ、それを聞いた露國の兵隊は、非常に怒つて、酒を飲んで、
「士官を叩つ斬つてやる！」

と、亂暴狼藉、大騷ぎしたのだつた。
その爲め二日の晩は、旅順の監獄は、暴れ兵隊で滿員で、それが戸を叩くやら、靴で蹴るやら大騷ぎであつた。

おゝ！水師營の會見

旅順開城約成りて
敵の將軍ステッセル
乃木大將と會見の
處はいづく　水師營

懐しい唱歌だ、そして國民の細胞の核にまで泌み込んだ歌だ。
おゝ！　歴史的なその會見。
日本の榮光の赫奕として水師營の廢屋に輝く。
日は、一月五日と定められた。

場所は、開城調印をした、その水師營の家、これは劉公正と云ふものの所有家屋だつた。
會見の前日四日、情に厚い軍神乃木大將は敗軍の將の心境を思ひ遣つて、遼東守備軍行政事務官だつた、後の露國公使、更に日露漁業の川上俊彦氏に、これも當時は參謀、後は政友會所屬の代議士で鳴らした陸軍少將津野田是重氏の二人に命じて、ステッセル將軍に鷄三十羽、シャンペン酒一打、葡萄酒一打を贈つた。そして五日水師營で會見したいと申送つたのであつた。
ステッセル將軍は忽ち快諾。
世界の戰史に燦然たる記錄を殘した、畫期的な會見のその日、一月五日は實に朗らかな好天氣風もなく暖かな、平和そのもののシンボルだつた。
會見の場所水師營の家は、彈痕の殘つた北側の屋根を、すつかり新らしい高粱と葺き換へた。
周圍の壁も新聞紙で張り詰められてはあつた。
だが、庭の一本のなつめの木、それに殘つた彈丸の跡の著しさは消さうとしても消すことの出來ない兩軍苦戰の證據だつた。
此の日、既に戰勝の榮譽を擔つた我が前線の諸部隊は、歩武肅々、旅順市街に日の丸の旗をな

ゞかせて進軍して居た。

その中を、感慨深いステッセル將軍は、太く逞しい葦毛の純粋なアラビア馬に雄然と跨つて、紅の色映える隈取りした水色の外套を着、副官ネギリスコイ中尉を隨へて、水師營に向つて、ぱく〳〵ぱく、と進む後に、參謀長レース少將もステッセル將軍と同じ扮裝で副官のマウチヤコフ中尉を隨へ、其の後へ從者五六騎、馬の歩みも思ひあり氣に續いた。

そして、從者は門前で馬を下りたが、ステッセル將軍とレース參謀長は二名の副官と共に、あたりの荒涼たる戰場の跡を見乍ら、口を、きつと結んで門に入り、會見の家の庭で馬を下りた。

既に、乃木第三軍司令官は參謀長伊地知少將、參謀安原啓太郎大尉、副官松平英夫大尉、川上俊彦氏を隨へて來て居た。

時正に、午前十一時四十分。

泰西の歴史に徵するに、嘗つてオスマン、パッシアが、プレヴナの城塞を出て降伏した時にはスコベレフ將軍は喝采して、之を迎へ、兩將軍は、向き合つて、しばらく默つて顏を見合つた。

處が、互ひに顏を見合せて居る中に、兩將軍の胸に、湧然、尊敬の念が溢れて來た。

と、忽ち、オスマン、パッシアの手は、がつきとスコベレフ將軍の手を握つたと云ふ。

今、露國の名將と我が軍神との、その會見の始めは、果して、如何であつたらう！？

おゝ！　だが、他の引例は要しないのだ。

どうだ、その素晴しい光景は！

始めこそ、兩將軍は形式的の辭令を交換した、が、瞬時の後に、まこと、名將は名將の心を知るのだ。

豁然！　意氣は投合した。

兩將軍の双頰には、親しさ懐しさの情が溢れた。

白髪童顏の乃木將軍、あの何とも云へぬ情味のある瞳を輝かせて、

「今日迄、お互ひに本國の爲めに敵對行爲を取りましたが、今は、はや戰鬪行爲も休止となつてかうして閣下と會見するのは、まことに光榮の至りです」

と云ふと、ステッセル將軍、

「仰せの通りです、私も亦、祖國の爲めに、盡せるだけのことは盡しました、そして、かうして

戰鬪行爲を休める時機に際會したのです、そして今、閣下にお眼にかゝる光榮を得ました、非常に滿足に存じます」

と答へた。すると、乃木將軍は、謹んで、

「我が　大元帥陛下は特に聖旨を傳へさせられ、閣下を待遇するには、武士としての面目と名譽とを完ふせしめよ、と仰せられました。閣下が本國へ歸還なさる場合には、小官は出來るだけの便宜をお與へしようと存じて居ります」

ステッセル將軍、瞿をうるませて、

「御厚意何とも御禮申上げる言葉がありません！　我が皇帝陛下からも、優渥な電報を頂いて、宣誓に關する勅許を得ました」

と頭を下げ、そして、

「閣下、閣下にお願ひがあります、それは他でもありませぬ、私が乘用にして居るアラビア馬があります、これを今、閣下に呈する光榮を與へて頂きたいのですが、お納め下さいますか」

と、乃木大將の顏を瞶めた。

乃木大將も、凝つとステッセル將軍を見て、

「御志、まことにありがとう、感謝します、しかし、嚴格な我が軍規は、御乘馬を私人として受けることは許されないのです、今、授受に關係して居ります我軍の委員に交付なさいまして、他日、小官の手に受領することがありましたなら、永く愛護を致しませう、小官の家も、古い武人でありまして、馬を愛することは先祖代々でした。今度の戰鬪でも、小官は北泡子崖で一頭の愛馬を亡ひました、今日でも、實に愛着に堪へません、今、閣下が、その愛馬と離別なされるお心持ちは、充分よく解ります、お察しします」

「ありがとう存じます、それにつけても思ひ出しますのは、閣下は此の戰鬪で二人の御子息を亡ひなされたと承つて居ります、まことに御同情申し上げます。私も一人の兒を、近衞に服役させて居ります。子を思ふ親心、深くお察しまして、お悼み申し上げます」

ステッセル將軍、さう云つて、兩眼をしばたゝいた。

が、乃木大將は、意外な面持ちで、

「いや、幸ひに武士の家に生れたゞけの甲斐があつて、一人は南山に、一人は二百三高地の激戰

に、それ〴〵戰死いたしました、小官は、皆共に、どんな犧牲を供しても、決して辭せないと思つた、そんな晴れの場所、大切な〳〵戰場で、死んで呉れたのは、正に死所を得たものとして、窃かに大いに滿足して居る處です」

と毅然として云つた。

ステツセル將軍は頷いて、

「成る程、さう云ふお心持ちで戰場に臨まれる閣下の武勇絶倫は、これは當然のことであります何と同じ軍人の身で、尊敬の言葉を申上げればよいか、全く、私は感に堪へません、御令息迄を國家の犧牲に捧げられる御決心、それを心窃かに喜ばれるお心持ち、さうです、神、神さまと申上げる外ありません、我々凡人は到底及び難い世界です、そのお言葉は身に泌みて、永久に崇敬の念を去らぬでせう」

感激して、改めて畏敬の眼を乃木大將の顔に向けたのであつた。

このシーンには、ステツセル將軍が露語だけで語るので通譯の任に當つた川上俊彦氏も思はず眼に涙を浮べたのであつた。

やがて、午餐となり、盃高く揭げて、健康を祝し合つた。

ステツセル將軍と馬

午餐が濟むと、此の歴史的光景を記念する爲めに、兩將軍、幕僚一同、庭前で撮影をすることゝなつた。

撮影が濟むと、ステツセル將軍は、部下に、

「馬を曳け！」

と命じた。

ステツセル將軍の愛馬は庭前に曳き出された。

「何をするのだらう？」

我が軍の幕僚も、露國の幕僚も、ぐるりとステツセル將軍を圍んだ。

すると、ステツセル將軍は、愛馬の鬣を撫で乍ら、

「馬も、しばらく走らないから、思ふやうには乘りこなせない」

と、下俯向いて、獨語して、ひらりと飛び乘り、ぱつぱつぱつぱつ、と、みなの見て居る前で圓く〳〵乘り廻つた。

それを見て居る乃木將軍の胸に、ステッセル將軍が敗軍の將として、鬱勃の氣を吐くに由ない心中と、それを僅かに乘馬にまぎらす心持ちとが、まざ〳〵とうつつた。

あゝ！　敗將、この敗將の乘馬！

乃木將軍は、きつと唇を結んだ。

深甚の同情が、胸に、こみ上げて來たからであつた。

英雄、英雄の心を知るのだ。

强きもの、また涙も多いのだ。

馬から下りると、ステッセル將軍は、乃木大將に再び云つた。

「閣下！　閣下に、此の馬が納めて頂けぬのが、何と云つても殘念で堪りません！」

そして、如何にも心惜し氣に、愛馬の鬣を撫でた。

乃木大將は、ステッセル將軍の心事が判り過ぎる程よく解つた。それは芝居で見る鹽原多助が

愛馬の靑と別れる以上の悲劇であつた。

で、乃木大將は一歩を進めた。

「ステッセル將軍、さほどに仰せられる馬の、唯今頂戴出來ぬは、まことに己むを得ぬことですだが、お心持ちはよく判る、では、せめても、閣下の馬具を頂きたい」

「馬具ですか？」

と、ステッセル將軍、晴れやかな顏になつて、

「馬具ならば、旅順に、精良な馬具一式が備へてありますから、それを差上げます」

「いや」

と、乃木大將は遮つて、

「その、御乘用のものが頂きたい、小官は露國の實用的な、戰時用のものが欲しいのです、閣下頂けるならば、その現在御乘用のものを頂く方が結構です、そしたら、小官は閣下の贈りものとして、此の上ない記念とすることが出來ます」

おゝ！　何と云ふ名將の言であらう、もののいゝのを欲する世間普通の人情を、超えも超えた

此の言！　全く、武神でなくば吐けぬではないか、おゝ！　我等は此の名將と共に此の世に生を受けた光榮を今更に思ふ！

ステッセル將軍、心を打たれて、無言で快諾したのであつた。

午後一時二十分、ステッセル將軍等は、水師營を出て、旅順口に歸ることゝなつた。

別れに臨んで、乃木大將は、ステッセル將軍と、強い〳〵握手を交し乍ら、

「旅順の御住居は、さぞ御不自由でせう、しかし、今、しばらく我慢して從前の生活を繼續して下さるやうに」

と挨拶した。

「承知いたしました」

ステッセル將軍は、靜かに答へた。

やがて、小春のやうに暖かい珍らしい朗らかな陽の中を、津野田參謀が先導となり、ステッセル將軍やレース參謀長は、今は既に、日本へ渡してしまつた旅順口へと歸つて行くのであつた。

その影、その馬と乘る人の後ろ姿！

松樹山砲臺へと歸る乃木大將の一行とは又別に、何と云ふ心を打つ情景であらう。

地上に血の滴りは消へず、眠る魂魄もまだ新らしく、耳には聽き慣れた砲聲が消へも失せぬのに、背き太陽のみは、春來る！　とのみ悠々照り輝いて居るのだつた。

敗軍の將兵を語る

馬は肅々として敗軍の將を乘せて行く。

先頭に立つた津野田參謀は、ステッセル將軍の沈默した姿に、何かしら、ものが云ひたかつた

「閣下！」

津野津參謀は呼びかけた。

「閣下は、乃木大將に面會されて、どうお感じになりましたか？」

すると、ステッセル將軍は、凝つと空を瞶めるやうにして、

「全く十年の知己に會つたやうぢや、あの會見は、まことにいゝ心持ちだつた、今日は愉快だつた！」

邊りは荒涼たる戰後の狀景だ。眼を閉ぢれば名將乃木の顏貌が髣髴とする。

昨日の敵は正に今日の友である。

ひし〳〵と、ステッセル將軍の胸を打つものは、人生のまざ〳〵とした姿だつた。

ステッセル將軍の幕僚も云つた。

「乃木大將のあの白髮童顏の印象の濃さ！　威あり、德備はり、それに涙がある、世界的名將を此の眼で見たのは何と云ふ光榮であらう、一度、一言を交換すると、もう、乃木大將には、何人も、悅んで服さねばならなかつたらう、强い深い印象だ、生涯到底忘るべからざるものだ、津野田さん！　あなた方は幸福ですな、あゝ云ふ名將の部下として生きる、羨ましい、まことに羨ましい！」

と繰り返し〳〵云つた。

津野田參謀は又、

「ステッセル將軍あなたが、一番恐ろしいと思はれたのは何ですか？」

と直截に訊ねた。

「恐ろしかつたもの――」

とステッセル將軍は、津野田參謀の顏を見て、

「それは二十八珊の彈丸でしたね、この大威力を發揮する重砲が來てからは、從來の防禦は何の役にも立たなくなつてしまひましたよ、どかんどかんと、みんな破壞されてしまつて堪りませんでした。

一體、私は、日露戰爭には不同意だつたのです、何故かと云へば、北淸事變の時、天津北京で副島、山口兩將軍と一緒に軍隊を動かしました、その時、感じたことは、世界で最も强いのは、日本の軍隊と、自分の率ゐる露國第三師團の兵隊である、と云ふことです。私は、日本軍の眞價を、よく知つて居たのです、日露戰爭を、一生懸命に主張した露國の政府は、日本軍の眞價を知らなかつたのです！」

敗將ステッセル、此處に於て、始めて、敗軍の將として、語るべからざる兵を些か語つたのである。

心中の不滿、察すべしだ。

そして、ステッセル將軍は、頬に苦笑を浮べ乍ら、

「此の要備はコンドラチエンコ將軍が、自から設計したものでした、その設計者がどうでせう、十二月三日に、東鷄冠山北砲臺で、軍事會議をして居る際に、日本軍の大威力である重砲隊の彈丸にあたつて、ぐるりと一座の九人が戰死したのです、その時、コンドラチエンコ將軍も、九人と一緒に斃れてしまひましたよ。

私は、これで、戰爭には三回出ました、そして運惡く、三回とも負傷しました。第一回は露土戰爭です、第二回が北淸事變、第三回が、此の旅順口の戰鬪です、今度も、これ此の通り、左の額に負傷しましたよ。

これからの私は、もはや田舍にかくれて、戰爭、兵馬と離れ、靜かに餘生を送りたい希望ですクロパトキン將軍とは、幼年學校時代からの友人です、しかし、クロパトキン將軍が、今、どんなに苦しい境遇にあるかと云ふことは、よく察することが出來ます」

と、しみじみ語つた。

鬼旅團長白襷隊長の中村覺少將は、此の兩將軍の會見に、二首の歌を詠んだ。

逢ひみては人にうらみはなかりけり
　ゆかしきものはもののふのみち
かたりあふ言の葉くさの花さきて
　ほまれはたかく世にかほるなり

白襷決死隊の華

此の光榮の旅順開城を招來した我軍の奮鬪、殊に、白襷隊の中に咲いた悲壯な一輪の華、を私は語らざるを得ない。

どうしても旅順を降伏させるには旅順背面の白玉山の敵壘を奪取する必要がある。

で、中村覺少將は決死の白襷隊を組織した。目的は、松樹山の補備砲臺を通り拔け、その上、その背後の新砲臺も舊砲臺も馳せ拔けて、新市街と舊市街との中央にある白玉山を占領して、兩市街の連路を、ぷつつりと斷ち切つて、敵勢を二分にしてしまひ、手も足も出せなくさせて旅順開城の運びに移る、と云ふのであつて、その任務の重大さは云ふ迄もない。

既に名譽ある決死隊員に選ばれた勇士達は、此の世の最後の休養をした。第三軍司令官、所屬師團長、所屬旅團長からの酒肴も思ひ殘す處なく平げた。

愈々其の日は來た、明治三十七年十二月二十六日、白襷隊全員は松樹山北麓に集合した。

命令一下、今は、はや　天皇陛下の御爲めに、御國の爲めに、白玉山上の露と消ゆるのである

風は肅々として山野に鳴る。露は冴えた。空には一杯の星。

午後八時だ。

時や遲し、と待つた命令は下された。

「突擊！」

靜かであつた部隊が一齊に、彈丸のやうに飛び進んだ。

おゝ！　爆彈勇士だつ！　工兵は竹竿に火藥をつけて、鐵條網を破壞した。

歩兵は猪の如く、たゞ、まつしぐらに突き進むのだ。

と、忽ち、ぱらぱらつ！　敵の機關銃は雨霰と飛んで來る。

「糞つ！　露助の彈丸なんか當るかつ！」

まことに肉彈だ、大和魂の發露だ、彈丸飛び來る毎に、勇氣百倍、我が兵士は、青く光る銃劍をきらめかして、突貫だ、突貫につぐに突貫だ。

そして、胸壁に、とうどう肉薄したのだ。

「今、一息！」

忠勇な兵士は、大膽不敵、胸壁内に躍り込んだ。

まことに鬼神も避ける勇氣だ。

が、何と云ふ遺憾！

敵の機關銃は、ばた〳〵ばたつ、と我が兵士を倒して行くではないか。

無念！　だが、徒らに死傷を增してはならないのだ。

「休戰！」

はやり男の足は、ぴつたりと止められた。一時間の休戰である。

「うむつ！」

我が兵士は敵陣を睨みつけた。

決死隊から脱け出た兵士は？

と、その時、白襷隊から一兵士が列を離れた。

そして、ばた〳〵つと後方へ走つて來る。

此の時、松樹山の左翼に前進して居たのは第十一師團司令部であつた。

其處には土屋、三浦兩將軍が立つて居る。

走つて來た白襷隊の兵士、それを見ると、何と思つたか、ひらりと身を翻して、元來た道へ引返へさうとする。

「おや？」

と思つた、副官、忽ち、

「あの兵士を捕へろ！」

と命じた。

「はつ」

と答へた上等兵二名、飛鳥の如く、白襷の兵士を引つ捕へた。

「來いつ！」

白襷隊の兵士は悄然として副官の前へ歩いて來た。

副官は、その姿を凝つて見て、

「おい！　お前は白襷の決死隊ではないか、何の爲めに戻つて來たのだつ」

「は」

兵士は、口を噤んで云はぬ。

「譯を云へ、譯を！」

「はつ」

兵士は答へるのみだつた。

「こらつ！　何故譯を云はぬのだつ！」

副官の大喝一聲に、

「譯は云ふことが出來ませぬ、放して下さい、第一線に戻ります！」

兵士は、喉に露を浮べて云つた。
「うむ、貴様、此處を何處だと思ふ、師團司令部だぞつ、さては貴様は、命が惜しくなつて逃げ歸つて來たのだな、決死隊員になる程の名譽を負ひ乍ら、何と云ふ不甲斐ない奴だ、さう云ふ弱い奴は日本軍隊の恥辱だぞつ、叩つ斬つてしまふぞ！」
副官は怒つた。
「いや！　待つて下さい」
兵士は遮つた。
「私も日本の軍人です！　命が惜しくて來たのではありません」
「それなら、何故引つ返して來たつ」
副官は激しく追及した。
「實は――」
兵士は、苦しい胸を吐き出すやうに云つた。
「お、親の處へ、金が送りたいのです！」

「何？」
副官は驚いて問ひ返した。
「戰場では將校以外に内地へ金を送る事は出來ないのだつ、それを知つてゐるかつ」
「はい」
兵士は、顔をあげた。涙が、たら〳〵と二筋、頰を傳つて居る。
「聞いて下さい！　私は、歩兵第十二聯隊第十二中隊の歩兵二等卒田村貌吉であります。郷里は愛媛縣温泉郡上山村、七歳の時に母に死に別れたのであります、それから父の手一つで育てられたのであります、家は貧乏であります、それに父は酒好きであります、私は幼ない時から、父の百姓を手傳つたのであります、處が、不運なことに父が病氣になつたのであります、病名は半身不隨であります、それで百姓が出來ぬのであります」
「それを、お前が一人でやつたと云ふのか？」
副官の瞳に、同情の色が動いた。
「はい、やりましたであります、病身になつても父は酒をやめませんであります、三合づゝは必

らず飲むであります、樂しみの無い父であります、私は父に酒が飲ましたかつたのであります、それで私は食はなくとも、父には酒を買つたであります」

「うむ」

「私は名譽ある甲種合格を致したのであります、私は父が心配なので村役揚へたのみました、役場では「父の面倒は見てやるから、心配せずに行つて來い」と云はれたであります、けれども、いくら役場でも、父に、酒迄飲ましては呉れぬと思つたのであります、それで私は、隊の給與の俸給を、みんな送つたのであります、そして淋しい父に酒を飲めと云つたのであります、戰友は有難いであります、私の事情を知つて、一枚一錢づゝでシャツを洗はせてくれたのであります、班長殿も上等兵殿も、氣の毒だと云つて、日用品をくれたのであります、それで私は日用品を一つも買はずに濟み、一錢も殘らず父に送れたのであります」

「ふむ」

「處が戰爭が始まりました、戰地からは兵卒は金は送れぬのであります、父は、父は、一人の兒を戰爭に出し、病氣で、好きな酒も飲めず、私は、父が、かわいさうだと思ふのであります」

「うーむ」

副官、感動して、田村二等卒の顏を瞶めた

死の直前の孝心

「それで、どうした?」

「はつ、戰爭になつてから二錢づゝ多く頂けるのであります、それを父に送りたかつたのであります、それで時々、旅團司令部に居る同鄕の吉田上等兵殿に、特にお願ひして、惡いことではありますがうまく野戰郵便局から、父に送つて頂いて居たのであります」

「ほう」

副官、腕を組んだ。

「その孝心故に命が惜しくなつたのか!」

「いーえ」

はつきり、田村二等卒は云つた。

「御國に捧げた命であります、惜しいなどと考へたことは一度もないのであります」
が、田村二等卒は、思はず、下俯向いた。
「副官殿！　白玉山の砲臺は、私達兵卒の生命を、いくつも捨てねば奪はれないのであります」
「うむ」
「私は名譽ある決死隊員であります、今度、突擊の聲がかゝれば、既に命は無いのであります、生きて歸らうとは思はないのであります、それを思ひますと、此處に一錢二錢と父へやりたい爲めに溜めた金があるのであります、それを送らずに死ぬのは殘念で堪らないのであります、私は一時間の休戰を倖ひに、此の金を父に送つて貰ふやう吉田上等兵に賴まうと、中隊長に暇を頂いて歸つて來たのであります」
「うむ」
「副官殿！　お願ひで御座います、此の金を父に送つてやつて頂きたいのであります、そして、田村二等卒を心殘りなく死なせて頂きたいのであります」
「田村！」

副官は、一歩進んで、田村二等卒の手を握つた。
「き、貴樣は、豪い奴ぢやぞつ！」
副官の兩眼から、ぱら〳〵、涙が落ちた。
「はいつ、ありがとう御座います、父に最後の金が送つて頂けませうか？」
すると、その時であつた。
司令部巡察に來たのが乃木大將。
副官と二等卒とが涙を出して居るのを見て、
「何事だつ？」
と訊ねた。
「はつ！」
涙を啜り上げた副官、
「この二等卒は、豪い奴で御座います」
と、その孝心を物語つたのだ。

凝つと聞いて居た乃木將軍、
「さうか」
と優しく頷いて、光つた瞳で田村二等卒を見た。
「田村二等卒！」
呼ばれた田村二等卒、直立不動の姿勢で、
「はつ」
と答へ乍ら、乃木大將が何を云ひ出すかと不安氣に耳を傾けたのである。

乃木將軍と孝行兵士

乃木大將は、優しい聲で、
「判つた！　その金は、司令部で預つて送つてやる」
「はつ、で、では送つて頂けますか？」
「うむ、だが、此の後決して金など送つてはならぬぞつ！」

「はつ」
田村二等卒、嬉しさに感涙に咽んだ。
「貴樣が此處へ退つたのを中隊長は知つて居るか？」
乃木大將は訊ねた。
「はつ、早く行つて來いと申されました」
「よしつ、それなら早く行つて働かねばならん」
「はつ、閣下！　田村二等卒は、もう思ひ殘す處はありません！　死なせて頂きます、日本の兵隊らしく立派にやらせて頂きます」
と答へて、金を副官に渡すと、勇み立つて前線へと馳せ歸つて行く。
その白襷の消へて行く姿を見送つた乃木將軍、眼を曇らせ乍ら、
「天晴れな孝子ぢや、副官、わしが、あの二等卒の金に少し足してやる！」
と云つて、澤山の金を足した。そして、事情を詳しく認めて鄕里の役場へ送つてやることを司令部に命じた。

愛媛縣の山上村役場では、村長と助役が立會つて、師團司令部から來た書面と金とを披いたのである。

そして、書面を讀み了ると、村長は、くゝゝゝと泣き出した。

「そ、宗右衛門さんは、豪い伜を持つた、幸福ものだ」

「さうです、二等卒で師團長や軍司令官のお目に止まり金まで下さると云ふのは、第一此の村の名譽です」

助役も、眼をうるませて答へた。

早速に、田村二等卒の父、宗右衛門は呼び出された。

そして、村長助役から、事情を聞き、金を渡されると、

「伜が、いま、せ、戰死すると云ふ間際迄、この私に酒を飲ませたいと、食ふものも食はずに、か、金を溜めてくれましたかつ、それを、司令官閣下や師團長閣下や、お豪い方々が金をふやして頂いて、う、う」

宗右衛門、泣き出した。

「も、勿體ないつ！　勿體ないつ、わしや、わしや、こんな勿體ない金で、酒が酒が飲めますか罰が當ります、ばちが！」

兩袖で眼をこすつて、啜り上げた。

みんなも貰ひ泣きした。

「村長さん！　助役さん！　わしは、もう酒は飲みません、鎭守の宮へ願かけます、そして酒を斷ちます！　龜吉！　龜吉！　よう、戰場でも、わしの酒飲みを恨まずになあ！」

村長は、涙を拂つて、

「宗右衛門さん、いゝことを云つてくれた、それが何よりの息子さんへの志ぢや！　な、あんたの息子さんは豪いものぢやぜ」

「あ、ありがとう存じます、ありがとう、み、みなさま、勘辨して下さい！」

宗右衛門は金を押し頂いて、

「使ひません！　此の金は使ひません！　寶です、伜の身代りです！」

と云つた。

天！　此の孝子に幸福を興へた。田村二等卒は、數度の戰爭に參加して名譽の負傷はしたが、芽出度凱旋、金鵄勳章功七級白色桐葉章を授けられ、永く孚養を盡した。

宗右衞門、勿論その時の金は使はなかつたのである。

旅順閉塞の計劃

旅順を陷落させる爲めの海軍の努力は亦、偉大なものがある。

それ計りではない、あの大軍を援護して無事に上陸させ、敵地へ赴かせるのは海軍の力である千里を奔る猛獸も、全く海では小兒である。殊に日本は四面環海の國、日露戰爭の時の海軍の威力、功績、それは海軍と比較して、孰れを兄とも、孰れを弟ともなし難いのである。

先づ、日露開戰となると、東鄕聯合艦隊司令長官は、直ちに艦艇を仁川に派して、敵艦「ワリヤク」「コーレツ」の二艦を殲滅させた。

それからは、專ら意を旅順艦隊の攻擊に注いで、二月十四日の晩には暗夜を幸ひとして、折からの大風雪を冒し大膽な水雷攻擊を行つた。

一方、第二艦隊を卒ゐた上村中將は二月十一日に、浦鹽斯德の露國艦隊を擊破する爲め、浦鹽斯德に向つた。これは露國艦隊が靑森近海に出沒して、我が商船を砲擊して沈沒させたと聞いたからである。

その日は、まことに嚴寒だつた。風は肌をつんざき、寒さは骨に浸みた。

甲板は、雪と氷に、すつかり埋まつて居り、見渡す海には結氷で一杯だ。

勇敢な上村艦隊は、海面の結氷を碎き碎き、進んだ。

處が、浦鹽斯德では、此の日が恰度日曜なので、水兵達は、い、氣になつて上陸して遊んで居たのだ。

其處へ、まさか來るとは思はぬ日本の軍艦が、黑煙を天に靡かせて、堂々とやつて來て、どかん！　どかん！　と砲擊したのだ、いやはや驚いたの、何のつて、周章狼狽して、急いで軍艦へ歸つて來るものがあるかと思ふと、軍艦と軍艦とが、すんでのことに打つかりさうになつて、それを避ける爲めに非常な苦心をし、漸く隊伍を整へた、脅え却つた浦鹽斯德の人々を安心させる爲めに、港外へ出やうとする頃には、もはや、我が軍艦の影も形もないと云ふ有樣、思ふさま敵

の荒膽を痛快にも、碎いてしまつた。

しかし一方、旅順港口の露國艦隊は、頗る優勢なもので、戰鬪艦巡洋艦以下二十隻もあり、これに自由に暴れられたら、兵隊を輸送することも、我國の領土を守ることも覺束ないのである。

その上、その艦隊が、悠々旅順の嶮を賴んで、奥深く潛んで居るのだ。之を大擊破することは容易でない。

其處で考へたのは、旅順の港口を封鎖して、敵艦隊の出て來れぬやう、雪隱詰めにしてしまふと云ふことである。

いや、その策は、この時に思ひ付いたのではないのである。俊傑揃ひの帝國海軍である。既に日露の風雲が危しくなつた時、今は明治神宮の宮司として明治大帝の祭祀を嚴かに勤行して居らる、海軍大將、當時の聯合艦隊三笠の參謀海軍中佐有馬良橋氏等は、旅順閉塞の豫定計畫を立て、居たのであつた。

船は即ち、天津丸、報國丸、武揚丸、武州丸、仁川丸の五隻、極秘の中に其の指揮者幹部の人名を定めて、成仁錄と云ふ連判狀に名が連ねてあつた。

曰く、有馬中佐、齋藤、正木、松村の三大尉、島崎中尉、山賀、栗田、南澤の三大機關士、大石中機關士、杉少機關士の十名であつた。この中に軍神廣瀨中佐の名が無いと云ふをやめよ、廣瀨武夫、當時の少佐は、松村大尉が九日旅順の砲擊に負傷した補缺として、其の名が加へられてある。

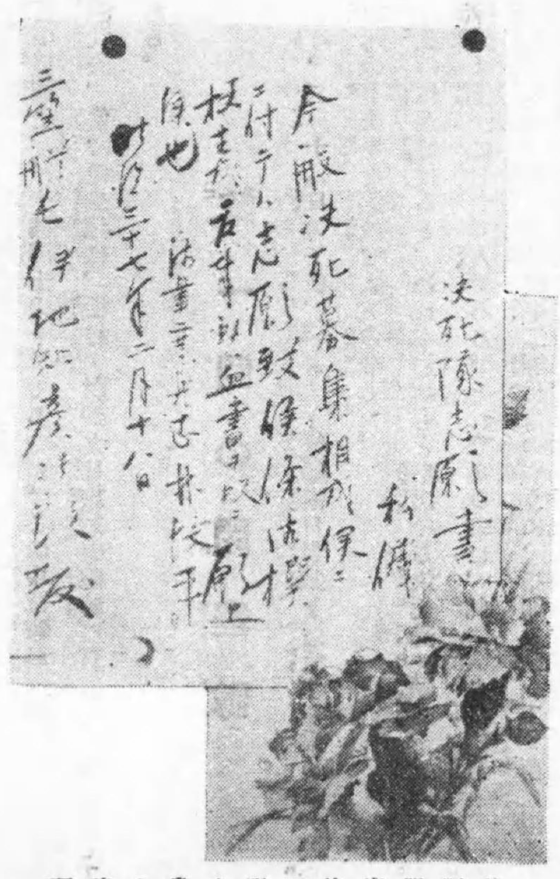
第一回の閉塞隊

時、二月十八日の午後、いよ／＼旅順港口封鎖を敢行する爲めに、司令長官は各戰隊に向つて決死の下士卒を選拔せよと命令した。

此の報が傳はると、われもわれもと申出でる決死隊志願者、遂に二千人以上に登つた。必要な隊員は僅かに七十六人である。それであるのに、此の大多數、流石、一死以て君國に報ずる帝國軍人である、中には林紋平二等兵曹のやうに、指頭を割いて、鮮血淋漓たる血書を認めて志願した壯烈な勇士もあつた。

此の志願者の中から、愼重な選擇をして、精髓を拔き、十九日、各閉塞船に分乘させた。

總隊員七十七名、即ち、第一閉塞隊として天津丸には指揮官として有馬良橘中佐、機關長として山賀代三大機關士、上信晉藏上等兵曹以下、下士卒十五名。



旅順閉塞決死隊血書の請願
海軍二等兵曹林紋平氏筆

第二閉塞隊として報國丸には指揮官として廣瀬武夫少佐、機關長として栗田富太郎大機關士、大沼今朝治郎一等兵曹以下、下士卒十四名。

第三閉塞隊として仁川丸には指揮官として齋藤七五郎大尉、機關長として南澤安雄大機關士、山田仲二郎一等兵曹以下下士卒十四名。

第四閉塞隊として武陽丸には指揮官として正木義太大尉、機關長として大石親德中機關士、米原正藏一等兵曹以下、下士卒十二名。

第五閉塞隊として武州丸には指揮官として島崎保三中尉、機關長として杉政人少機關士、中川作太郎一等兵曹以下、下士卒十二名。

の面々である。孰れも此の重大中の重大事、難關中の難關を天晴れ突破すべく、一身を顧みぬ一粒選りの勇士ばかりである。

命令は下つた。第五驅逐隊が前衛となつて先づ旅順口外に至り、敵の哨艦を擊退して、閉塞船隊の進路を開いた上、東方に轉じて、敵の注意を、そちらへ惹く、すると閉塞船隊は其の間に港口に突入して、露國艦隊の出入が出來ぬやう、船を埋めて港口を閉いでしまふと云ふのである。

船が沈んでしまつたら、決死隊員は、みんなボートに乘り移つて引揚げるのである、それを千鳥、隼、鵲、眞鶴、燕の五水雷艇が收容する、そして第九艇隊は老鐵山東方海岸に居つて、收容洩れの隊員を救助する、その上、第四驅逐隊は夜明けに、も一度搜索して、收容洩れがあるか

無いかを確かめる、第一驅逐隊は、閉塞船が突進した後で、警戒の任務をなし、成功か不成功かを偵察して本隊に報告することに手筈は極まつたのである。

そして愈々二月二十日の午前八時、冬雨が靡々として降り、濛々たる氣煙が海上に漂ふ中を、各閉塞船は出發したのである。

此の時、旗艦三笠からは軍艦マーチに續いて、留送別の悲壯な軍樂の音が流れて來た。各艦では、戰友が、こぞつて「萬歲〳〵」を大呼した。

信號は「成功を祈る！」

と傳へられ、閉塞隊員も各艦に向つて、

「成功を期す」

「好意を謝す」

と挨拶した。

これが別れである、行つて再び還らざることを期して居る閉塞隊員、見交す顏と顏とに何と、無量の思ひが、惜別が、鬼をも挫く勇士の瞳に一點の露となつて、寒雨の甲板上に落ちる。

隊位肅々、艦艇は根據地を出で、旅順へと向つて行く。

見送る各艦兵員は、其の煙の遠く彼方へ消へ去る迄、暗鬱な雨空の中に立ち盡したのであつた

かくて、既に別離を遂げた閉塞隊員、勇みに勇んで、二十一日には韓國黃道海州の南西沖合の前進陣地へ到着した。

此處で閉塞船は、閉塞隊員ばかりとなつて從來の船員は別れ去るのである。忽ち訣別の宴は張られた。

そして、思ひ〳〵に記念の書を書いた。

「天下人生の快事何物か之に加へやう、二十八珊の砲丸に五尺の體を粉碎し去るも、笑うて瞑するに足る」

と云ふのもあれば、

「生を櫻花國の男子に享けて此好時に逢ひ、海軍々人たりしことを謹んで天地に謝す」

と記すのもあつた。

報國丸の指揮官廣瀨武夫少佐は、此の一詩を勇揮な筆に示した。

軍神廣瀨中佐の生ひ立ち

こゝで、私は廣瀨中佐の風格を傳へねばならない。

おゝ！　軍神廣瀨中佐、それこそ大和魂の顯現である、日本帝國臣民は、事一度、廣瀨中佐に及べば、忽ち、魂の法悅を感じ、血沸き肉躍るのを知るのだ。

偉大なる英傑廣瀨中佐は、其の血液の中に代々忠義無二の眞髓を傳へて來た人だ。廣瀨中佐の祖先は、人も知る南朝の忠臣菊地氏であり、中佐の父君廣瀨重武氏は、舊岡藩士で、明治維新の時の勤王家である。

明治元年五月二十七日、廣瀨中佐は大分縣直入郡竹田町字茶屋ヶ辻で呱々の聲を擧げた。

十歲の時、父君重武氏が岐阜縣高山町の裁判所長になつたので、廣瀨中佐も伴はれて、飛驒の高山へ行き、喚章小學校に入學した。非常な當時のスポーツマンで、あの寒い飛驒で、雪滑りを

して身體を練磨して、長兄勝比古氏が海軍に奉職したので、中佐も、海軍々人たるべく一心に勉强した。

そして、明治十六年十月に上京して、當時、海軍々人の卵製造所とまで云はれた改玉社へ入つて、學科の勉强は素より、身心鍛練の爲めに柔道を一心にやつた。

その當時の逸話が今に殘つて居る。

中佐が入學した翌年の事である、寄宿舍の室長が暴慢な男で、下級生に對して何事にも威張り散らして居たが、或る晩のこと、新入生と議論して、負けてしまつた。

すると、室長、プライドを傷けられたとでも思つたか、急に威丈高になつて、

「何をつ！　貴樣、生意氣なことを吐かすと殴り飛ばすぞつ！」

と拳固を振り上げた。

その時迄、何も云はずに默つて聞いて居た廣瀨武夫は、

「おい！　待て」

と室長の前へ、にぢり出た。

「君！　弱い者を虐めて何する、よせ、よせ」
と云ふと、室長は、
「何をつ！」
と怒つて、今度は、廣瀬武夫の方へ向つて來た。
「き、貴樣も生意氣なことを吐かすと、横つ面、打ちのめすぞつ」
眼をむいて睨み据えた。
「よし！」
口の中で云つた廣瀬武夫、矢庭に、机の上に在つた短刀の鞘を拂つた。
「來いつ！　勝負なら、眞劍だぞつ」
廣瀬武夫、ぐつ、と室長の顏を睨みつけた。
「呀つ！」
驚いた室長、
「待つてくれ、そ、そんなことはせんでもいゝ」

と、匆々に逃げ出して、それからと云ふものは廣瀬武夫の云ふことを何でも聞いた。
その翌年、優等で改玉社を卒業して、其の年の十一月、海軍兵學校へ入學したが、その卒業の前年、殆んど不具者にでもなりさうな重傷を負つたので、體力の恢復に一生懸命になつて、明治二十二年四月、海軍兵學校卒業の時の成績は良好ではなかつた。しかし、體力は思ふ通り、恢復して、卒業の時には十七貫六百目あつたと云ふ。
少尉任官は明治二十四年一月であつた。
その年の九月には濠洲へ遠洋航海に出たが、二十五年四月に歸朝して、間もなく中尉になり、日清戰爭の時には運送船の監督をし、其の後扶桑艦の航海士となつたが、思ふやうに戰鬪に加はることが出來なかつた。
その時の心中の殘念さ、

生干扶桑　死干扶桑
一死豈己　七生護皇

と一詩を賦して僅かに慰めた。

明治二十八年の二月に大尉となり、横須賀水雷部に勤務した。

廣瀨中佐が露國公使館附を命ぜられたのは、此の大尉の時、明治三十年六月であつた。露國の東洋に對する野心は、もはや既に被ふことの出來ないものがあつた。

廣瀨武夫は、やがて東洋の來るべき風雲をよく察知して居た。

「よし！　ロシアの正體を摑んで見せるぞつ！」

當時の廣瀨大尉は、心中、大いに期する處あつて、勇ましく赴任の途に就いたのであつた。

滯露中の帝國軍人廣瀨武夫の行動こそ、どうしても詳記せずには居れぬものがある。おゝ！

其處にこそ勇ましい日本男子の發露があるかと思へば、人間廣瀨の測々として胸を打つ眞情を見るからである。

廣瀨中佐と財部大將

當時、露國へは隨分素晴しい人物ばかりが派遣された。

後の田中政友會總裁がロシアに行つて居たのは有名な話だが、明石大將も大佐時代に行つたのである。風流船長の名を擅にした八代大將、當時は少佐として露國公使館に駐在して居た。

廣瀨大尉が赴任後二年八代少佐は、歸任することゝなつたので、其の後任を命ぜられた。

それより先き、赴任して僅かに十ヶ月經つか經たぬかに、露國で、廣瀨大尉は故郷の祖母の死の悲報を受けた。續いて、父、重武氏の訃報に接したのである。

英雄涙多し、廣瀨大尉は二つの引續いた不幸に、眼を惡くする程泣いた。

しかし、今や、露國の國情を知ることは、日本に執つて最も重大なことであつた。悲しみの中から廣瀨大尉は活潑に行動して、つとめて交際範圍を廣めた。

ある時、露國の海軍省で、いろ〳〵雜談の末、露國將校が、

「日本の柔道と云ふものは役立ちますか、一體日本は團體としては強いが、個人としては體格が

劣つて居るから、何をやつても個人勝負ぢや駄目でせう」
と云つた。それを聞いた廣瀨大尉、鼻先で笑つて、
「さあ、一つ柔道でお對手して見ますかな」
と答へた。
廣瀨武夫は明治二十年講道館に入門した猛者であつた。露國へ行つた時は三段になつて居た。
當時、海軍大臣であつた山本權兵衞伯は、廣瀨武夫に向つて、
「君は何を趣味にしとる？」
と問ふた。すると、廣瀨武夫は、言下に、
「柔道です！」
と答へた位であつた。
この山本權兵衞伯の娘婿が現海軍大將の財部彪氏、廣瀨中佐とは大の親友で、しかも講道館の柔道仲間だつた。
財部彪氏が山本權兵衞伯の愈々婿と定まる頃、廣瀨中佐は云つた。

「おい財部、貴樣は裸一貫でも出世出來る男なんだぞ、それに山本さんの婿になどなつてみろ、財部は、閨閥で世に出たと云はれるぞつ、男だ、止めろ！止めろ！止めなきや、爾後、廣瀨武夫は貴樣とは交際せぬぞつ」
と啖呵を切つた。
が、財部氏は廣瀨中佐の忠告を無にして、愛婿に納まつてしまつた。
話は飛んだが、廣瀨大尉が、對手になつてみやうか、と云ふので、露國將校側では、最も強い將校を三人選んで、海軍省の廣場で試合する事になつた。
大兵な露國將校は既に蔑視を含んで廣瀨大尉を見た。
小さい、廣瀨大尉、たゞ、にこ〳〵笑つて居る。

廣瀨中佐の柔道

愈々試合だ。
大きな露國將校は、大手を擴げて、さつと廣瀨大尉を鷲掴みと、飛びかゝつて來た。

それを、、、さつ、と廣瀬大尉、得意の大腰にかけたと見る間もなく、

「えいつ！」

露國將校は哀れにも、芝生の庭に、蛙のやうに叩き伏せられてしまつて居た。

續く二人も、無雜作に投げ飛ばして、

「どうです」

とも云はず、につこりして座に戻る廣瀬大尉に、

「呀っ！」

とばかりに、露國將校一同は聲を呑んだ。

「ふうむ」

一種脅えた顏色で、廣瀬大尉を、まじ〳〵と眺めて居るだけだつた。

此の噂が、いつとはなしに露國皇帝の耳に入つた。

露國皇帝は興深く覺へて、廣瀬大尉を召して、宮中で、改めて、廣瀬の柔道を見ることゝなつた。

今度選ばれた露國側の勇士こそ、露國屈指の勇猛なものであつたが、出るものも、出るものも、いと容易に、露國人に比較して誠に小兵の廣瀬大尉に、片つ端から投げつけられ、叩き伏せられてしまつた。

「うーむ、大したものぢや」

廣瀬大尉は、悉く、露國皇帝の感動する處となつた。

「廣瀬大尉と日本の柔道」この噂は忽ち露都の中心話柄となつてしまつた。

だから、その勇ましい風貌に接しやうと、露都の貴婦人、淑女は、廣瀬大尉の出る場所へは競つて行つた。そして祕かに憬慕の念を起す婦人も實に多かつた。

その中で、廣瀬大尉が昵懇で、戰術などを教へて貰つた某少將に令孃が三人あつて、どれもこれも、廣瀬大尉を戀して惱んで居た。その姿を親心として見棄てゝ置く譯には行かない。

で、少將は、廣瀬大尉に、どれか自分の令孃と結婚してくれと賴んだ。

――が、廣瀬大尉は、かねてから、

「軍人は國に事があれば何時死ぬかも知れぬのである、妻帶して、妻を寡婦としての不幸を與へ

るのは忍びない、軍人には妻は不必要である！」

と信じて居た。

其處で、勿論、露國少將の娘を思ふ切なる心も斥けねばならなかつた。

あはれ、失戀に泣く三人の令嬢。

いや、此の噂を聞いて、同じく落膽してしまつた數多の露國の婦人連！

後年、廣瀨中佐の戰死を知つて、此の敵國の婦人達は、大聲を擧げて泣いたと云ふ。

しかし、しかし、私は、此處に祕錄を語る。

廣瀨中佐は、露國に於て、遂に一人の婦人の愛をだに、受け入れなかつたか！

否、否、廣瀨中佐の死を知つて、せめて、日本に、いや廣瀨の國日本に何か生涯に役立ちたいと、涙の中に、健氣な志を起した美姫があつたのである。

露國の「戻り橋」

芝居でやる戻り橋、この戻り橋の鬼女が、廣瀨中佐には鬼女でなく、憐れにも美くしい一輪の

花であつたのだ。

柔道と日本軍人廣瀨の名が露都を賑はして居た頃のことである。

廣瀨大尉は、露國皇帝の侍從長の家で御馳走になつた歸りがけ、アレキサンドル公園にさしかゝつた。

すると、不意に後方から、

「もし、もし

と優しい女の聲がする。

夜は、もう更けて居る、それに女の聲、廣瀨大尉は、ふりかへつた。

其處の瓦斯燈の下に、しよんぼり女が立つて居た。

廣瀨大尉が振り向くと、彼女は、

「あたし、ネバの橋向ふへ參るもので御座いますが——」

と云ふ。

「ネバの橋向ふ？」

廣瀨大尉は、思はず問ひ返した。
「そりや遠い、それに夜更けだ、送つてあげませう」
廣瀨大尉は、平素の氣性から、かう親切に云つた。
「ありがとう存じます」
と云つて、從つて來る女、を凝つとみると、雪の道に映えて、その顏は、くつきりと白く、世にも美人だ。
すると、向ふから醉つ拂ひが五六人、歌を唱ひ乍ら、やつて來て、
「こりや、こりや」
と、彼女の前へ大手を開げた。
「あつ！」
彼女は思はず、廣瀨に取り縋つた。
廣瀨大尉は女を背後にかばつて、
「これは俺の保護する婦人だ、君たちは何だつ」

と睨みつけた。醉つ拂ひ連中、その氣勢に呑まれて、すご〳〵と去つた。
氣がつくと、彼女は廣瀨大尉の身體に、しつかりと嚙りついて居るのだ。
その身だしなみの香水の香が、そして、艶麗な彼女自身から發酵する、得も云はれぬ匂ひが、交錯して、胸をときめかせるのだ。
驚いて、廣瀨大尉は、彼女を振りもぎらうとした。
けれども、彼女は執拗に食つついて離れないのだ。
そして、
「貴方は日本の廣瀨でせう？」
と云つた。
「どうして私の名を知つてますか？」
「ほゝゝ」
彼女は、あでやかに笑つた。
「今、ロシヤで貴方の名を知らない女がありますか」

さう云つて彼女は、
「あたし、その貴方に送つて頂いて、やつと念願がとゞきましたわ」
「さう云ふ貴方は、一體誰方です」
廣瀬大尉は、きつとなつて訊ねた。
「あたし、つまらない女です」
「レディ、貴女の名を明かにして下さい」
「おほゝ、レディなんて、あたし、賣春婦なの、ベテルスブルグの闇に咲く、ポーランド生れの憐れな花よ」
「えつ！」
廣瀬大尉は驚い。
「まあ！　そんなに驚かなくつたつていゝでせう、あたしの宿、本當は、このトルスカヤ街の二階の一間ですのよ、さあ、いらして下さい」
彼女は廣瀬大尉の腕を、ぐい〳〵引つ張つた。

「いや、いけません、僕には、まだ仕事が殘つて居ます」
「いゝえ、離すものですか、あたし、漸く念願が屆いたもの、死んだつて離しはしませんのよ」
女は、ぐい〳〵引つ張る、手を首にまきつける
「駄目だよ」
「いーえ、いゝものをあげますから」
「何にもいらないから離してくれ！」
「まあ！　何て貴方は初心で野暮でせう、實は、あたしは——」
彼女は、今迄の嬌笑を、がらりと棄てゝ、嚴肅な顏になり乍ら、
「是非共、貴方に見て頂かねばならないものがあるのです」
「いや、何も見たくない、離してくれ」
「貴方！　貴方は、露國陸軍省の祕密命令書はいらないのですか」
彼女は低い、しかし力强い聲で廣瀬大尉の耳に囁いた。
「えつ？」

「そら、御覽なさい、とにかく、いらつしやるものよ」
と、女は、とうどう、廣瀬大尉を、その宿へ引つ張り込んだ。

打明ける秘報

部屋へ入ると、彼女は双頰を眞赫にして、恥かし氣に、もぢ〳〵して居たが、つと、廣瀬大尉に身を寄せて、
「あなた！　失禮をお免し下さいまし、實は、貴方に、お話ししたいことがあつたのです、それは他ではありません、今度アレキシイフが、いよ〳〵」
「えつ、何ですつて？」
廣瀬大尉は耳を澄ました。
「行きますのよ、極東大守に任命されて、旅順へ派遣されることになりましたわ」
「えつ？」
廣瀬大尉は、そして、彼女の顏を瞶めた、

「そんなことを、貴女は一體何處で知つたのです？」
廣瀬大尉が、眞顏で、きめつけるのも無理はなかつた。
アレキシイフと云へば主戰派の急先鋒である、その急先鋒が旅順へ乘り込む、いよ〳〵明らかに日本に對する挑戰なのだ。
風雲、正に急！
すると女は、ドアを、も一度調べて見て、紙片を出した。
「これは、その情報の寫し書き、この宿へは、よく露國の海軍士官が遊びに來るのよ、それからうまく探り出したのよ」
「ふうむ」
廣瀬大尉は、唸つた。
そして、
「一體、何だって、そんなことをする必要があるのです」
「あたし、貴方が戀しいの、慕はしかつたの、いーえ」

彼女は、きつとなつて云つた。
「實は、あたし、あなたに御頼みしたかつたの、あたし達の敵を討つて下さい！」
「敵？」
意外な話ばかりで、廣瀬大尉、尙、驚いてしまつた。
「さうです」
彼女は、凛とした聲で、
「ポーランドの敵を討つて下さい」
「ポーランドの？」
「はい」
と答へた彼女は、思はず涙ぐんで下俯向いた。
「今こそ、もう、何も、おかくしは致しません、あたしこそ、あたしこそ、ポーランドの志士コシュースコの曾孫で御座います」
「えつ、では、貴女が、あの有名なポーランド貴族、コシュースコの曾孫！」

廣瀬大尉は鸚鵡返しに云つて、そして、
「ふうむ」
と唸つて、がつき、と腕を組んだ。

愛國の志士コシュースコ

廣瀬大尉をして、かくも感動させた志士コシュースコとは、そも何人か。
コシュースコは西歴一七四六年、今から、百八十七年前の、二月十二日にリスアニアに生れた長じて、軍籍に入つて、一七七七年にアメリカへ渡つて、獨立戰爭を助けた。
コシュースコの名を一世に擧げたのは、一七九二年のヴビエンカに於ける露國との戰爭であつた。僅か四千の寡兵で、精鋭一萬八千の露軍と戰つた時であつた。
一七九四年にはポーランドの奮起を促がし、其の執行官となり、農民軍を率ゐて、ラクラウイツチで、露軍を粉碎したのである。
そして、ワルソウは彼の手に歸した。だが、露國は、プロシアの援助を藉りて、再びコシュー

スコを攻撃して、その爲め、コシュースコの軍は、血涙を呑んで城下の盟をなし、コシュースコ自身は捕虜の身となつたが一七九六年、釋放された。

それからのコシュースコは、英國、アメリカ、フランスを歴訪して、專心祖國の獨立を計つたが、その成果を見ないうちに一八一七年十月十五日、遂に歿してしまつた。――が、コシュースコの名は、ポーランドの英雄として、ポーランド第一の義臣として、名將として、武人の鑑となつて居るのだ。

そればかりではない、コシュースコは、勇氣があるばかりでなく、その人柄は愛情の實に深い人であつたのだ。

今に語り傳へられる好逸話は、ある時、隣村の牧師の所へ、葡萄酒を寄贈する爲めに、馬丁にコシュースコの愛馬に贈物をつけて持つて行くことを命じた。

馬丁は、馬に乘り、贈物を馬の脊につけて隣村へ向つた。

すると、村はづれで、一人の乞食が現はれて、馬丁に、

「お情けで御座います、どうぞ施してやつて下さい」

と破れた帽子を差し出した。

馬丁は知らぬ顔して、通り過ぎやうとしたのであつたが、どうしたのか、馬が、ぴたりと止まつて、一歩も進まうとはしないのである。

馬丁は、仕方がないので、財布から金を出して、乞食に與へた。

すると、馬が、今度は、ぴよこ〳〵歩み出したのである。

「變な馬だなあ、俺に施しを强制しやがる、この馬、乞食と親類かな」

と馬丁は呆れてしまつたが、何ぞ知らん、コシュースコは、外出すると乞食に物を施すことを鐵則として居たので、馬もつい、乞食の前へ來ると、其の習慣に、すつかり染まつて居たのであつたのだ。

しかも、ポーランドも嘗つて三國干渉の古い出來事は遺恨骨髓に徹して居るのだ、日本とても同じ、遼東半島還附のあの時の三國干渉は、日本國民、忘るとも忘るべからざる切齒すべき出來事だつたのだ。

ポーランドの志士が、我が軍人に愛され、敬され、ポーランド人が日本を慕ふのは、此處に原

因がある。

軍神廣瀨中佐の戀人

「あの、英雄コシュースコの曾孫娘！」

廣瀨大尉の眼は熱血に燃えた。

なるほど、それでは、か樣に、いつも心掛けて、大切な情報を耳に入れてくれたことも判る。

「廣瀨！　東洋の勇士廣瀨！　ポーランドの敵を討つて！」

彼女は、しつかり廣瀨大尉の手を握つた。

「宜しい！　露國の東洋侵略は、もう明々白々の事實だ、他日露國と戰ふ時に、たしかに、貴女の曾祖父のことも思ひ出しませう」

「嬉しい」

コシュースコの曾孫娘は、廣瀨大尉の胸に飛びついて來た。

祖國愛！　それが、やがて、かつしと、嬋妍窈窕たる此の金髮の美人を、强く胸に抱かせた。

淚と共に抱かれ乍らに、彼女は、めちやくちやに、廣瀨大尉の唇を求めたのである。

それから、彼女は、廣瀨大尉の滯留したペテルスブルグの下宿へも訪れるやうになつた。

おゝ！　軍神廣瀨中佐の戀は、その童貞は、日本の美女、日本の令嬢でなく、國際的舞臺の、しかも、その有名な志士の孫娘に、達せられ、童貞は破られたのであつた。

間もなく廣瀨武夫は少佐に進んだ、そして明治三十六年一月十六日には歸朝の命令に接したのである。

わざと思ふ處があつて、嚴寒のシベリア旅行をし乍ら、遠く迂回して滿洲に歸路を求めた廣瀨少佐を送るべく、コシュースコ嬢は、ペテルスブルグ驛頭へ來た。

折からの白雪の中に、眞紅の血の祖國の爲めに躍る勇士と佳人、その情熱の別離こそ、雪も解けよ、熱淚は、双手の握りしめた手の上に、ぱら〳〵と降り注いだのだ。

そして、日露開戰、それ以來、コシュースコ嬢は、どれだけ廣瀨少佐の身を案じ、武運を祈つたかも知れない。

然るに、廣瀨少佐は、天晴れ軍神として、世にも讃嘆指く能はざる戰死を遂げた。

傳へ聞いたコシュースコ嬢は、半ば信じ、半ば疑つて居たが、諜報勤務の明石大佐と、ふと會ふチャンスを得て、明石大佐から、その壯烈な戰死を聞き、俄破とばかりに泣き伏したのである

「廣瀨は、私の心をこめた日本腹卷を身につけて、露西亞を出發したのです！」

彼女は、美くしい眼を眞赫に泣き腫らして云つた。

そして、明石大佐に縋り、

「何か私を役立たして下さい、せめて廣瀨への冥福の爲めに！」

と願つた。

日露戰爭中、歐州にあつて、露西亞を牽制する運動をした明石大佐の爲めに、その後、此のポーランドの美姫が、相當な働きをしたのは云ふ迄もない。

勿體ない手袋

さて、第一回の旅順閉塞隊は二十二日午後六時、錨を拔いて、愈々目的地へと向つた。

この夜は寒月冴え渡つて、凄壯なる門出の感が一層强かつた。

二十三日は實にいゝ天氣であつた。

報國丸の指揮官廣瀨少佐は、部下の隊員一同を甲板に集めて、先づ、ポケットから禮服用の手袋を出して、皆に示した。

そして、嚴肅な態度で云つた。

忘れもしない明治二十七年四月十七日の事であつた。その時　聖上陛下には横須賀に行幸あらせられ、自分は光榮ある御召艇小蒸氣の指揮官を命ぜられた、誠に恐れ多いことであるが、陛下が御召艇へ玉歩を移させ給ふ折に、勿體なくも御手が、此の手袋に觸れさせ給ふたのである。自分は、之を此の上もない光榮と心得て居る、だから此の手袋は自分には何ものにも換へ難い寶物である。であるから自分は、日清戰爭は勿論のこと、露國留學中でも滿洲旅行中でも、常に此の手袋を肌身離さずに持つて居て、たゞ〳〵奉公の道を勵んで來た。つい、先日の旅順の海戰の時も、之を懷中して居たので、自分が乘つた朝日には、ちつとも彈丸が中らなかつた、自分は、これを天佑と思ひ、陛下の御稜威に依るものだと心得て居る、又、此の手袋の中には尊い靈があつて、自分の爲すことを御照覽あらせ給ふと、確く信じて居る、で、今度の此の閉塞隊員たる事の

出來たのは自分として此の上ない名譽であると共に、責任の重大さを痛感して居る。志願者二千人の多數の中から選まれた皆も、全く天佑であると思つて居る。既に天佑我等が上にあるのである、依つて、閉塞作業も、天佑に依つて成功することは疑ひない。皆は決して恐れてはならない勇敢に、沈着に、充分各自の任務を遂行しなければならぬ」

兵員一同、水を打つたやうに肅然、襟を正して聽き入つた。

廣瀨少佐は、それから、一同に、その手袋を戴かせた。

そして、更に云つた。

「自分は、いつも人の困難危險として、いやがる所へ進んで行つて氣力を養ひ膽力を練る事に心がけて居る、今度は男子の膽力を練るに、これ以上の好機はないのである。みんな、膽力が据つて居るか居ないかを試すには睾丸を握れ、睾丸が、だらりと下がつて居ればよし、縮み上つて居るやうでは駄目だぞつ、今度の任務は頗る重大だ、膽力が据つて居なければ駄目なのぢや、何事でも進む時には、規律整然たるものがあるが、いざ退却となると混雜し易い、これは膽が据つて居ないからだ。今度は、引揚げの時に、殊に膽力を据えて混雜してはならぬ、大石良雄が赤穗城を明け渡した時のやうに、西鄕隆盛が城山に於ける最後のやうに、落ち着き拂ふこと、それが第一だ」

と訓示を與へた。

兵員は、みな、廣瀨少佐の言葉を膽に刻んだ。

二十四日の午前零時半、閉塞船隊は豫定の如く老鐵山西南方に達した。

これより先きに、前衞の第五驅逐隊は、强烈な敵の探照燈の光りを避け乍ら、岸に沿つて、徐々に進み、午前一時半に港口に近づいた。

見ると、流石に、我が艦隊の度々の奇襲に驚いた敵は、非常に警戒を嚴重にし、山上の四面の砲側には間斷ない展望が置かれ、山下の碇泊軍艦には哨兵が張り詰めて居り、數隻の哨艦は港外に出て、敵の姿やある、と待ち構へて居る。

其處で、第五驅逐隊は黃金山の下に突進して、先頭の陽炎が、先づ、敵の軍艦に水雷を打つ放し、二番艦の不知火も敵艦へ一發打ち込み、急いで沖へ出ると、叢雲、夕霧も各々、敵艦に一擊を與へ、敵の哨艦を掃蕩した。

處が、此の時、敵の探照燈は無暗に照らし出した。さうかと思ふと、黄金山の砲臺は、すわこそ、敵艦襲來と、周章して、一齊に、どかん〳〵と巨彈を夜空に打つ放し出した。その彈丸が海に落ちると、さつと、高く〳〵水柱が立つ、その間を探照燈が電光のやうに交錯する。

その凄まじさ、全く言語に絶した。

閉塞隊は、凝つと機會を待つて居たが、探照燈が一匹の魚の跳ね上つたのも見逃すまいとし、敵の砲彈は休みなしに擊つて來る。

で、總指揮官有馬中佐は、

「これは時機でない」

と考へた。其處で、船を報國丸に近づけて、廣瀬少佐に相談した。

すると、廣瀬少佐は、

「探照燈は氣安めです、大砲は闇に鐵砲的なしと來てるから心配は要りませんよ、私は天佑に依つて、成功を確信します！」

と答へ、兵員を激勵する傍、祕密海圖を處分し、塗料は刷毛で、帆布製の幕に露國語で、

「余は日本海軍の廣瀬武夫なり、今來つて貴軍港を閉塞す、而も是れ唯其の第一回のみ、今後幾度來るやも知れず」

と大書した。

今は既に斷の一字あるのみ、探照燈も砲彈も何のそのである。

閉塞隊は猛然として運動を起した。此の時午前四時十分。先づ總指揮官有馬中佐の天津丸を先頭に、續いて廣瀬少佐指揮の報國丸、齋藤大尉の仁川丸、正木大尉の武揚丸、島崎中尉の武州丸が殿りだ。

おお！ 正しく神の姿！

閉塞船隊が、老鐵山の南西側から、ちよこり顏を出すと、さあ事だつた。

探照燈が、探し出したのだ。

敵は忽ち、百座以上の堡壘の砲門を開いて、一齊に砲火の雨を降らせる。

全く、百雷の一時に落ちたやうな物凄さだ。水柱は、惡魔のやうに、高く〳〵夜空に聳える。

けれども、決死の勇士達、どうしてひるまう、まるでアスファルトの上を圓タクの行くやうに悠々、大膽不敵に進んだが、たゞ、困ることに探照燈と云ふ奴である。こいつが、きらつ、と來ると、人間は盲目になつたも同然で、何もかもが光つて眼が眩んでしまふのだ。

で、先頭の天津丸、この探照燈の光りの中を盲探しに突進した時、船が、殘念乍ら開洋礁附近の岩礁に打つ突かつた。

有馬中佐、直ちに、赤燈信號を揚げて、

「面舵取れ！」

の注意を續く報國丸に與へた。

報國丸は眞に間一髪だつた。さつと右舷に轉じて前進すると、前の山が影になつて、探照燈を一寸遮つた。

「天佑だつ」

廣瀬少佐は叫んで、凝つと眼を据えると、港口の一端が僅かに見へた。が、然し、直ぐに探照燈で見えなくなつた。

しかし、大體の見當はついたのである。

廣瀬少佐は突進と覺悟を定めて、栗田大機關士を呼び、

「港口は分つたぞつ、全速力で突進だつ」

と命令した。

栗田大機關士も飛び上らんばかりに大喜び、機關室へ驅け込んで、

「焚け！　焚け！　罐が破裂しても構はぬぞつ」

と絶叫した。

全速力を出した報國丸は港口の燈臺下の尖岩に衝突した。そこで、もはや、よからうと廣瀬少佐、機關を止めさせて、總員を上甲板に集め、爆破を試みたが、その電纜が敵彈の爲めに損じて居て駄目だつた。しかし、衝突した處に大孔が開いて、海水が、どし〳〵侵入して居り、彈丸を受けて、船橋が火災を起してゐるので、沈沒することは確實と思はれたので、廣瀬少佐は、總員に引揚げを命じた。

時正に、午前五時、總員は悉くボートに乘り移つた。廣瀬少佐も最後に乘り移つたが、船中で

活動する爲めに、佩用の短劍をはずして置いて忘れて來たことに氣が付いた。

「いかん！」

廣瀨少佐の頭に、源義經の弓の流れたのを拾つた故事が思ひ浮んだ。少佐は、彈丸が雨飛し、探照燈が眼を眩ませる中を、危險を冒して勇敢にも再び沈沒しつゝある報國丸へ戻つて、短劍を吊つて歸つて來た。

ボートは忽ち漕ぎ出す、が、彈丸はボートを中心に、めちやくちやに落ちて來るのだ。廣瀨少佐の部下角久間二等兵曹、藤本一等機關兵、武野二等機關兵は傷いた。

この時、廣瀨少佐は、儼然として船尾に立ち乍ら、微笑して、

「どうだ、みんな擧丸を握つて見たか？　餘所を見すに、此の俺の顏を見ろ！」

と叫んだ。

その姿、その聲の凛々しさ、今や天から、軍神が天下つたやうである。

兵員、みな、限りない力と勇氣とが、瞬間、胸の中へ流れ込むやうな氣がした。

そして、ボートは、夜明け方に、衞艇隼に收容された。

仁川丸は其の夜、黃金砲臺の南東で、沈沒船に突つかゝり、進むことが出來ぬので、爆破して沈沒させ、武揚丸は天津丸の沈沒した外方約四百米突の處で自ら爆沈し、武州丸は敵彈に舵機を折られて饅頭山下に沈沒した。此の時の犧牲者は、仁川丸の梅原二等機關兵が戰死したゞけで、後は報國丸の三名の負傷者だけだつたが廣瀨少佐がボートの後尾に突つ立つた姿は、後々まで、部下に思ひ出すだに、

「神さまのやうだ」

との印象を强く深く與へた。

第二回閉塞隊の壯擧

日本の艦隊の勇猛さが、世界中を震駭させると、露國では、東洋艦隊司令長官を更迭して、スタクル中將を本國へ召し還し、後任に當時、世界の戰術王とされた有名なマカロフ提督を任命した。

處が、此のマカロフ提督こそは、實に間接の廣瀨少佐の戰術の先生だつた。そのこつは廣瀨少

閉塞後の旅順口

佐知り抜いて居る。

かうなれば、どうしても旅順閉塞を一日も早く片附けなければならない、其處で東郷司令長官は、大本營に要求して、第二回閉塞船として、千代丸、福井丸、彌彦丸、米山丸の四老朽船を吳工廠で艤裝させ、此の閉塞船には岩石を積載して、甲板に二門の機關銃を備えつけ決死隊員は、同じ人を幾度も萬死の中へやるのは濟まぬと云ふので、新らしく選拔にかゝつた。

が、どうしても第一回の隊員が、も一度決死隊員にさせてくれと云つて聞き容れぬ。其處で、准士官以上の幹部は第一回と同じ人とし、それに若し指揮官が倒れた場合に、代つて指揮をする爲めに指揮官附將校を一人宛增員して、下士卒は、三笠で血書した林紋平二等兵曹と富士の赤松虎太郎三等兵曹の二名だけを再び用ひ、後は志願者を募つた。處が、今度は以前に倍して、數千人に上つたので、按分比例で各戰隊から採つた。

第一閉塞隊千代丸には指揮官として海軍中佐有馬良橘、指揮官附海軍中尉島崎保三、機關長大機關士山賀代三、二等兵曹林紋平以下下士卒十五名。

第二閉塞隊福井丸には指揮官として海軍少佐廣瀨武夫、指揮官附上等兵曹杉野孫七、機關長大機關士栗田富太郎、一等兵曹飯牟禮仲之進以下下士卒十五名。

第三閉塞隊彌彦丸には指揮官として海軍大尉齋藤七五郎、指揮官附海軍中尉森初次、機關長大機關士小川英雄、一等兵曹村上卯吉以下下士卒十三名。

第四閉塞隊米山丸には指揮官として海軍大尉正木義太、指揮官附海軍中尉島田初藏、機關長少機關士杉政人、二等兵曹鹽谷巳之資以下下士卒十三名。

彌彦丸の大石中機關士が小川大機關士と代つたのは大石中機關士が、その後の戰鬪に負傷して治療中だつたからである。

決行は二十五日夜と定められた。依つて二十三日迄に準備を終つた各閉塞隊員は、その夜、船員と隊員と訣別したが、其の時、廣瀨少佐は同郷の機關長石田汀氏に記念の爲めハンカチーフに

揮毫した。

それには、墨痕淋漓として、

丹心報國　一死何辭　與船癈骨　旅順之陲
右報國丸を指揮し旅順に閉塞の途に上らんとする時

七生報國　一死心堅　再期成功　含笑上船
右福井丸を指揮し再び旅順口閉塞の途に上らんとする時

正　氣　歌

死生有命不足論　鞠躬唯應酬至尊　奮躍赴難不辭死　慷慨就義日本魂
一世義烈赤穗里　三代忠勇楠氏門　憂憤投身薩摩海　慷慨就義小塚原
或爲芳野廟前壁　遺烈千年見鏃痕　或爲菅家筑紫月　祠存忠勇不知寃
可見正氣滿乾坤　一氣磅礴萬古存　嗚呼正氣畢竟在誠字　呶々何必要多言
誠哉誠哉斃不止　七生人間報國恩

指揮福井丸　再赴旅順閉塞　錄舊作　贈千石田機關長

と認めてあつた。

石田機關長、之を貰つて感激の涙に咽び、

「僕も殘つて、君の壯擧に加はりたい！」

と、廣瀨少佐の手をしつかり握つた。

六十を越した老船長も感激して泣いた。

此の時、杉野上等兵曹は、歌と俳句を一つづゝ詠じた。

身は失せて海の藻屑と化するとも
たましひのこす異國のうら

死ぬは今地獄の門の出來ぬ間に

翌二十四日は强風怒濤の爲めに豫定は變更されて一日延期になり、二十五日午後六時三十分に閉塞船隊は、愈々出發した。

二十六日、集合地點に到着した閉塞船隊は、此處で悲壯な軍樂隊の音と、萬歲の聲に送られ、

まつしぐらに旅順港口に進んだ。

二十七日午前二時、老鐵山の南方に達した我が閉塞船隊は、旅順港内から、殷々たる砲聲を聞いた。

これは、我が前衞の第一驅逐隊が港口を偵察して、敵の哨艦を攻撃したので、敵艦が港内へ逃げ込むと同時に、敵の艦隊や、黄金山、老虎尾半島の砲臺から、一齊を砲撃を始めたのであつた

杉野兵曹長は何處？

探照燈は雷光のやうである、大砲は轟く、水雷は、縱横無盡に發射される。

だが、悠々として、我が六十八人の勇士は、恰も敵前ではないやうな顏をして進んで行く。

先頭、千代丸は黄金山下の海岸近い港口水道の入口まで勇敢に突破して、爆沈した。

續く廣瀨少佐の卒ゐる二番船福井丸、忽ち千代丸の左側に出た。

廣瀨少佐、位置宜し、と見た、そして直ちに投錨させた。

その一刹那、敵の驅逐艦が間近く來て、水雷を放つた。それが、忽ち福井丸に命中した。船底

は轟然たる響と共に裂けた。海水は激流のやうに流れ込んで、見る〳〵うちに沈沒しかゝつた。

廣瀨少佐は、直ちに總員を上甲板に集めた。そして、ボートを卸させた後、

「みんな集まつたか、番號！」

と號令した。

處が一人不足して居る。

杉野兵曹長だ。

杉野兵曹長の任務は、航海中は指揮官の補佐であつて、港口に突進すると同時に、船首錨の投下と、船首塗具庫に仕掛けてある六吋砲彈に、點火することであつた。

だから、投錨と同時に杉野兵曹長は、直ちに船艙へ驅け下りたのである。

しかし、正に、爆藥に火を點けやうとした其の時、敵の水雷の爲めに、粉碎されて、悲壯な最後を遂げたのかも知れない。

とにかく、杉野兵曹長と一緒に前甲板の配置に就いて居たで他の兵員も杉野の姿が、何時消えたかを知らなかつた。

廣瀨少佐は、はつ、とした。
そして、大聲に、
「杉野！　杉野！」
と叫んだ。が聞えるものは砲彈の音と、怒濤の音ばかりだ。
兵員も絶叫した。
「兵曹長どの、兵曹長どの！」
が、答へは、何處からも無いのだ。
二三の兵員は、忽ち船内を馳せめぐつた。
が、影もない。
廣瀨少佐は、
「杉野！　杉野は居ないかつ！」
大聲で、わめき乍ら、船内を一巡した。そして、ボートの傍へ來たが、杉野の姿は無い。
船は一刻の猶豫もなく沈んで行くのだ。

「杉野！」
廣瀨少佐は、悲痛な聲を張り上げた。
「杉野！」
廣瀨少佐は、又船内を驅け廻つた。もはや船室は水で一杯だ。
が、杉野兵曹長の影もない。
水は既に上甲板を餘すだけとなつた。
もう、躊躇する時ではないのである。
しかも、砲彈は頻りに飛んで來た。探照燈の光りは、相變らず眩惑させる。
それに、素晴しい怒濤だ。
が、廣瀨少佐は部下を棄て去るには忍びないのだ。
危險、危險、もう一歩の猶豫もない處へ、廣瀨少佐は、敢然、足にまつはる黑潮を蹴つて、必死の聲をふりしぼつた。
「杉野！　杉野は居ぬか！　杉野！」

その聲！　その慈愛の籠つた聲が怒濤に泌みて行つた。
三回目だ、廣瀬少佐は杉野兵曹長の姿を求めて、水浸りの船内を驅けた。
が、無い！
「うむつ」
無念！　廣瀬少佐は上甲板に戻つた。
もはや、上甲板をも怒濤は洗つて居るのだ。

廣瀬中佐の最後

ボートには兵員一同が待つて居る。此の一瞬をはずせば、船は沈沒する、と、ボートも亦、其の渦中に引き込まれて轉覆するのだ。
「廣瀬少佐どの！　お乘り下さい！　もう、いけません！」
一同は熱涙を呑んで操作を促すのだ。
今は、萬事休矣。

廣瀬少佐は、尙ほも最後の一聲、
「杉野！　杉野は居ぬかつ！」
と叫んで、答へないのを知り、已むなく、如何にも去り難く、ボートに乘り移つた。
ボートは忽ち本船を離れて、荒海の中へ漕ぎ出された。
敵の探照燈は、直ちにボートの在所を探し出した。
そして、砲彈は、廣瀬中佐の乘つたボートへと雨霰と注ぐ。
杉野を索め得なかつた悲愁の廣瀬少佐は、しかし、ボートに乘つた部下の身を思つた。で、毅然として、ボートの左舷後部から、
「みんな、睾丸に觸つて見たかつ」
と大聲し、更に、
「俺の顏を見て、しつかり漕げつ」
と、元氣付けるのを忘れなかつた。
一彈は、風を切つて飛んで來た、と思ふ間に、ボートの中央で一生懸命漕いで居た小池二等機

關兵が、血煙あげて殪れた。
「小池が、やられましたつ！」
櫂を握つたまゝ、胴を眞二つにされて、悲壯な死を遂げた小池！
その報告を耳にすると、廣瀨少佐は、
「よし！　分つたぞつ、騒がず、俺の顏を見て漕げつ！」
廣瀨少佐は、力ある聲で激勵した。
次の一瞬だつた。
びゅーん、と砲彈が唸つて來たかと思ふと、鮮血が、ぱつとボートに箍つた。
と見る、山本二等機關兵の面上は、血潮に染つた。
そして、栗田大機關士の軍帽へ、さーつと、紅の雨が降つて、腥風は邊りをこめた。
栗田大機關士は山本二等機關兵が傷いたものと思つた。
それで、
「山本、しつかりせい！」

と叫んで、山本のオールに力を添えた。
山本二等機關兵は驚いた。山本は栗田大機關士がやられたものと思つたからだ。
と、忽ち、
「呀つ！　水雷長がやられたつ！」
と絶望的の叫びが揚がつた。
おゝ！　今の今迄、「俺の顏を見て、しつかり漕げ！」
と勵聲して居た廣瀨少佐の姿は無い。
今の血煙、それは、廣瀨少佐その人のであつたか！
一同は驚いて見廻した。
あゝ！　其處には、五尺の體の名殘である、たゞ、一片の肉片と、血汐に濡れた地圖があるのみ！
「あゝ！」
無限の感慨に打たれた一同、慈父を失つたやうで、ぽとぽと、ぽとぽと、熱涙が迸るを禁ずる

ことが出來なかつた。

廣瀬中佐の遺骸

廣瀬少佐は、福井丸に乘るとき、同志を顧みて云つた。

「萬が一にも、此の閉塞の任務を終へて、命を全うすることが出來たなら、俺は上官の許しを得て、ジャンクに乘り込み、單身敵地の旅順へ入り込んで、アレキシイフ大守に面會し、降伏を勸告しようと思ふ」

さうだ、軍神廣瀬中佐、若しも命があつたら、嗚呼、我々は、どれだけ多くの學ぶべきを得たらう、どれだけ、日本國民の士氣を强め得たらう。

さもあらばあれ、廣瀬少佐の忠烈悲壯無二の死は、未來永劫、懦夫をして立たしむるのである偉なる哉！　軍神、廣瀬武夫！

尙ほ、廣瀬少佐は、福井丸の船橋に、

「尊敬すべき露國海軍々人諸君、請ふ余が名を記憶せよ、余は日本の海軍少佐廣瀬武夫なり、既に二回此處に來れり、其一回は報國丸を以てせり、更に幾回か來らんとす」

と露語で記した。

少佐の遺骸は、其後、波に引かれて旅順港口に至り、福井丸の附近に漂ふて居たと云ふ。死しても尙ほ、部下杉野兵曹長を求めたのか、幾回も來らんとす、の如く、魂、こゝに來つたのか、不思議と云へば不思議である。

それを發見した敵は、叮重に收容し、四月一日、旅順に於て、勇士に對する最大の敬意を以ていとも盛大な葬儀が營まれたと云ふ。

廣瀬武夫、死する時年三十六であつた。卽日海軍中佐に任ぜられ、今や、帝都の神田にいとも高く、杉野兵曹長と共に、永劫國民の龜鑑として銅像が建設されてあり、普く世人に仰慕されつゝある。

悲報頻りに到る

さて、第二回閉塞隊三番船の彌彥丸は福井丸の左側に相並んで爆沈し、最後の米山丸は、福井

丸と彌彦丸の中間を過ぎて、水道の中央燈臺直下に進んで、投錨した時に、敵艦の水雷が命中したので沈沒した。そして、其の引揚げにも、福井丸程の犠牲なく、千代丸隊員と彌彦丸隊員とは燕に、米山丸隊員は鵠及び雁に收容され、福井丸隊員は、廣瀨少佐戰死の後、栗田大機關士以下四名の負傷者を出し、オールは折られる、クラッチは碎かれる、まことに慘憺たるものがあつたが、よく危險區域を脱して、霞に收容された。

第二回閉塞では、戰死者は廣瀨少佐杉野兵曹長下士卒二名、重傷者は島田中尉、輕傷者は正木大尉栗田大機關士の外下士卒六名で、他は、ことゞく無事であつた。

マカロフ提督は、港口を全く封鎖されては、やり切れないと考へた。

それで、寧ろ、今の中に港外へ出て、日本艦隊を攻擊しやうとした。

俊敏な我が艦隊が、ぼんやりして居る筈がない。

早くも、それと悟つて、夜半に、危險を冒して、港外に、出て來たらば爆沈してやれと、水雷を方々に沈沒した。

そして、我が艦隊は一戰隊を、わざと、誘ひに出動させ、敵艦が、うか〳〵と出て來る處を、海上に漂ふ濛氣を俟ひに、我が艦隊は、一齊に、どつとばかりに、突進した。

「おや？」

と察した敵艦は忽ち、艦頭をめぐらして、旅順港内へ、逃げ込まうとした時、その時、かねて沈沒された我が水雷に引つかゝつて、敵の旗艦は、爆沈してしまひ、マカロフ提督は、とうとう討死してしまつた。

そればかりではない、キリール公も亦、負傷して、海中に墜落し、辛うじて救はれ、敵は慘敗した。

その機に乘じて、我が聯合艦隊は、第三回の旅順閉塞を五月三日に敢行した。

船は八隻、そのうち五隻は港口で爆沈したけれども、敵の防備が頗る增大したから、忠勇な我が將士は多大の損害を受けた。

しかし、この爲めに、巡洋艦以上のものが港外へ出ることは全く出來ぬやう、完全に袋の鼠にしてしまつた。

それでも、小汽船は旅順へ往來して、水雷など設置する危險があるので、東郷司令長官は、

政府の命令を受けて、五月二十六日に、遼東半島の南部の封鎖を宣言して、國際法規に依つて、嚴重に封鎖を行つた。

一方、浦鹽斯德艦隊は、時々、我が近海に出沒して、或は金州丸を擊沈し、常陸丸、佐渡丸等を傷けた。

金州丸が敵艦に發見されたとき、多くの將士の生命を失くする事は忍び難いので、幹部が露艦に交渉に行つて居る間に、卑怯な露艦は、金州丸を擊沈させたのである。この時、船に殘つたのは下士卒ばかり、みんな一齊に甲板に躍り出て、せめてもの一彈を、その銃口にこめて、敵艦を射擊した。

船は刻一刻沈む、しかし、忠勇なる我が下士卒は、上半身が水中に沒する迄、斷乎として銃を執り、天皇陛下萬歳を絶叫して、海中に沒した。

その壯烈、勇壯、卑怯なる露艦の將校も、全く感激して、涙を誘つたのであつた。

上村中將の第二艦隊は之を聞いて切齒扼腕、一生懸命に敵艦を搜索したが、遂に探し出すことが出來ない。

さあ、國内の騒ぎは非常であつた。

「上村中將は何をして居る！」

と憤慨して、上村將軍の留守宅へは、石や瓦が、夜となく晝となく投げ込まれた。

それも、その筈である、常陸丸の遭難こそは全く、國民の血涙を絞らせた。

常陸丸最後の軍歌

それは水無月十五日の出來事であつた。

事毎に大敗した露軍は大いに驚いて浦鹽斯德艦隊にベゾブラゾク中將を司令官として新任し、ロシア號を旗艦として、グロムボイ、リューリツクの二隻を從へ、六月十二日に浦鹽斯德港を出て、陸軍の連絡を斷つ爲めに、運送船を擊滅しやうと計つた。

そして、十五日、霧の濃いのを幸ひとして、玄海灘に現はれ朝の九時ごに、我が御用船和泉丸を擊沈した。

この頃、常陸丸、佐渡丸は、重要任務を負ふて、戰地に向つて居た。

常陸丸には近衛後備歩兵第一聯隊本部と、第二大隊（第八中隊だけ缺けた）と、第十師團の糧食縱列とで、兵士が千九十六人、それに船員が百二十名、馬が三百二十頭と重要材料とが載せてあつた。

そして、十五日七時過ぎに玄海灘にさしかゝつたのである。

この日は浪は靜かであつたが、曇つた空と海との間に一杯濛氣が籠めて、展望はきかなかつた常陸丸と、それに續いた佐渡丸は、益々霧が濃くなるので、相互ひに警めあつて、前後して進んだが、ふと、沖の島の方に砲聲を聞いた。これは不幸なる和泉丸の擊沈された音であつたのだしかし、常陸丸、佐渡丸は、それと知らう筈がなかつた。我が艦隊の演習とばかり思つて居た處が、忽然、濛氣を破つて現はれたのは、三本檣四本煙突の敵艦グロモボイであつた。

「呀つ」

と驚いた船長英人ビショップは、武裝して居ない常陸丸は逃げるが一等だと、ぐるり船首を轉じたが、時既に遲かつた！　敵との距離は、甚だしく接近して、もう逃げる餘地はなかつた。

そのうち、敵艦ロシアとリューリックは左右から、常陸丸を挾んでしまつた。そして、

「止れつ！」

と信號すると共に、彈丸を、常陸丸へ二三十發亂射した。常陸丸の甲板は爆裂した、舷側は碎けた。機關部は損傷した。

そればかりでない、無法な露艦は、此の戰鬪力のない小羊のやうな我が商船に更に五六十發の砲彈を、容捨なく打つ放したのである。

彈丸は轟然と爆發する。忽ち死傷者は續出し、血は到る處流れ、肉片は飛び、常陸丸は慘憺たる狀態となつてしまつたのであつた。

我が忠勇なる兵士は、無念の齒嚙みをして、露艦を睨んだ。

あゝ！　しかし如何せん、千里を奔る猛獸も水の上では如何とも爲し難いのである。

この狀勢を、凝つと瞶めたのが、沈勇果斷一世に鳴る聯隊長陸軍歩兵中佐須知源次郎氏であつた。

神色自若、今は既に、脫れるの途なしと悟つて、いでや日本武士の潔よき最後を見せて後學の爲めにさせてくれんずと、全兵員を甲板に集めて、謹嚴にして、沈痛な語調で口を開いた。

「無念乍ら、今や敵艦の包圍を受けて、進退全く谷まつた。我等は、天晴れ、上陸して、敵と華々しく戰つて報國の誠を盡さうとした、しかし、敵と一戰も交へず、敵地を前にして、一歩も踏まぬうちに、この遭難は遺憾とも遺憾である、去り乍ら、これは全く天であり命である、事既に此處に到つた以上は、我等は日本軍人らしく潔く處決するのみである。皆、よく帝國軍人たる體面を保つて、日本男子の名譽をけがしてはならぬ」

熱涙、双頰に流るゝを拭はず、悲痛の言を須知中佐は吐いた。

「はつ！」

部下一同、無念の涙を呑んだ。

既に、皇國萬歳を唱へて、水中に躍り込むものあり、切腹するものあり、ピストルで、ぐつと敵艦を睨めつけ乍ら自殺するものもあつた。

須知中佐は訓示を與へた後、船室へ歸つて、中隊長大尉長尾庸三、大尉橋本省三兩氏以下將校十六名兵士二三名と顔を合せたが、その時、旗手、大久保少尉は、聯隊旗を涙を以て拜し、寸斷しやうとした。

「待てつ、俺が處分する」

須知中佐が叫んだ時、又もや巨彈は唸つて飛來し、忽ち將校十二名を、ばつたり卽死させ、大久保少尉も斃れてしまつた。

「うむ」

唸つたは長尾大尉、重傷に苦しみ乍ら、帶劍を拔いた、かつきと我が腹に突き立てた。

大隊長山縣俊信少佐、齡、既に五十七歳、老將校であつたが、かくと見るより怒氣滿面、白髯を震はせて、かち〳〵と無念の齒嚙みをなし、

「うむ、生き代り、生れ代つて、此の無念を晴らさでおくべきか」

と叫ぶや否や、大刀を拔き放つて腹一文字に搔つさばいた。

橋本大尉も、短銃で、我と我が咽喉を貫く。

殘つたものは聯隊長と一兵士とだけ。

聯隊長須知中佐、燃燒物を集めて、聯隊旗と貴重の書類を燒き棄てた。

最敬禮して、それを瞶める須知中佐の瞳！

しかも、竿の半ば迄焼けた時、又もや飛び來つた彈丸は、須知中佐に命中したのだ。

おゝ！　須知中佐の肉塊は飛んだ、血潮は流水のやう、眼もあてられぬ酸鼻の極であつた。

が、此の時、波間から不意に唱歌が起つた。「膺てや懲らせや露西亞國」の軍歌である。

何と云ふ悲壯な、激越な口調か、臨終のきわに、海中に漂ひ乍ら、軍歌を唱ふ、これぞ日頃、大聲の聞え高かつた大友軍曹だ。と見る間に、忽ち、これに和する軍歌の聲が、あち、こちの浪間から聞えて來る。

そして、やがては萬歳の聲と共に、微かに消えて行くのであつた。

おゝ！　何と云ふ壯烈、凄烈、鬼神を哭かしめるではないか。

快哉！　上村將軍健在

上村將軍を恨んだ國民も無理はない、しかし恨まれた上村將軍の心中こそ、涙なしでは思はれぬのである。

しかも、時來れり！　頃しも八月十四日、しののめ白む頃、煤煙をたなびかせて來た恨み重なる露西亞艦隊、上村中將の胸は躍つた。

「それつ！　此機をはずすなつ」

上村將軍

と、決死、獅子奮迅の猛撃激戰、遂に、敵艦リユーリツ號を撃沈し、ロシア、グロモボイ兩艦に、大打撃を加へ、我軍は大勝利を得たのである

その時の、上村中將以下第二艦隊の將士の喜びは如何ばかりであつたらう。

否、國民の感激は素晴らしかつた。

知らずして、將軍を恨み、將軍の留守宅に瓦石を投げ込んだものは、みな、將軍邸の前へ來て

其の無禮を陳謝したのであつた。

それより、四日前、旅順艦隊は、陸海協同作戰に居堪らず、八月十日、意を決して、めちやくちやに旅順港口を脫出した。

それつ！　とばかりに我が聯合艦隊、忽ち、迎えて、一大海戰を演出した。

敵はウイツトゲフト中將が指揮官となり、戰鬪艦六隻、巡洋艦五隻、驅逐艦八隻から成り、我が艦隊に誘はれて、約三十海里の沖合で、互ひに砲戰を交へたが、勝負決せず、五時二十分、戰鬪を再び開始するにあたつて、我が砲彈は、敵の旗艦の司令塔に命中し、ウイツトゲフト中將はとうどう戰死したので、敵將ウイトゲフキー公爵は、代つて指揮し、信號で、旅順へ逃げ歸れと命令したが、その命令が通ぜず、敵艦隊は或は擊沈され、或は水雷艇隊の夜襲に逢つて轟然艦はめちやくちやになつてしまつた。

かうして、聯合艦隊は陸軍との協同作戰で、旅順港內の艦船を全く廢物にさせてしまつたのである。

そして、今を去る三十年前、日本帝國大勝利、旅順開城の光榮ある日が、一月元旦、鷄鳴と共に、日出ずる國のシンボルである初日の出と共に、來たのである。

何と云ふ因緣であらう。

我等は憶ひ起して、陛下の御稜威と、天佑と、我が忠勇なる將士に、滿腔の感謝と敬意を捧げ赤誠報國を誓はずして居られやうか。

おゝ！　光榮ある、燦たる日本帝國！

麻布第一聯隊の旗手

更に、此處につけ加へて置きたいのは、聯隊旗を死守する、我が將卒の好範例である、孰れの聯隊も、その聯隊旗を奉持するに優り劣りはないが、これは旅順攻略の時、あの南山の激戰に如何に帝都麻布步兵第一聯隊が奮戰、聯隊旗を守つたか、の話である。

此の聯隊には乃木大將の令息が所屬して、戰死した。聯隊長は小原大佐であつた。

步兵第一聯隊が東門を破壞して、一氣に攻めやうとして、先頭に勇ましく翻る聯隊旗を奉持して居た旗手の岸少尉は、敵彈に、ばつたりと倒れた。

「殘念！」
岸少尉、斃れ乍らに叫ぶと、江澤少尉は、忽ち驅けつけて、
「岸少尉！　しつかりせい！」
「無念だつ、聯隊旗を頼む！」
「よし！」
「江澤、南山のてつぺんへ、聯隊旗を立てゝくれよ」
「判つたぞつ、心配するな、しつかりせい！」
勵まして置いて、江澤少尉は岸少尉に代つた。
聯隊旗は、城門の上に、更に、勇ましく、南山への進擊に、飜つた。旗手は江澤少尉。
處が、鐵條網の前で、敵がさ、あーつと砲彈の雨を降らせた。
「おつ！」
と、聯隊旗の竿が、折れると同時に江澤少尉の身體は、續けざまに三發の敵彈を受けて斃れた
「旗手がやられたぞ！」

聯隊長小原大佐、振り向くと同時に、敵彈に前額を射られた。
「聯隊長がつ――」
と副官は、馳せ寄ると、
「聯隊旗はつ！」
聯隊長は苦痛の中から、聲をふりしぼつた。
「佐藤少尉が奉持して、すゝ――」
んで――と云はぬ間に副官岡村中尉も敵彈にやられ、折重なつて倒れた。
「聯隊旗はつ？」
又もや聯隊長の聲！
「野村少尉が代つて――」
と介抱の古田少尉が答へた。
その野村少尉も傷いた。
そして、麻布第一聯隊の聯隊旗は、旗手が遂に下士の宮崎軍曹になり、軍曹は熱涙を拂ひ乍ら

高々と軍旗をかざして進み、夕暮、南山の高地に飜つた時には、新らしく旗手となつた加藤少尉が、戰友の血に染まつた軍旗を捧げて、泣いた。泣いた。

憶へ！　憶へ皇國の人柱、皇國の人柱。

憶へ！　皇國の人柱

非常時日本の新年には、嘗つての旅順開城、更にそれまでの、將士の苦闘慘闘を！

そして改めて自身を直視せよ。

日本男子の本懷が、焦點が、はつきりして來るではないか、奮起と努力の感念が、何と、湧然旺然たるのを覺えるではないか。（終）

昭和八年十二月十六日印刷
昭和八年十二月二十八日發行

悲絶！壯絶！血涙旅順開城秘史

【定價金貳拾錢】

著者　松波治郎

發行兼印刷者　東京市神田區仲町二丁目十四番地　小泉泰明

印刷所　東京市神田區仲町二丁目十四番地　漫畫時代印刷部

不許複製

發行所　東京●神田●仲町二ノ十四　漫畫時代社
振替東京二九二九六番　電話下谷(83)八一一五、六番　五八二三番

非常時叢書

（定價十錢 送料二錢）

既刊

一九三五、六年（皇紀二五九五六年）

危し！生か死か！！日本はドウなる？（忽ち三十版）

世界は闇だ、列國は光を求めて漂ふ船だ。そして日本興亡の秋來る——それが目捷の間に迫る一九三五、六年だ。危し！一九三五、六年生か死か！日本はドウなる？是こそ時勢を憂へ國家の前途を考へる士の大問題だ。本書は全國民必讀の非常時讀本

既刊

昭和九年の景氣はドウ動くか？（發行即日賣切大增刷）

讀まねば損する、讀んで生活の指標を樹てよ！

國家非常時の秋——時代の勝利者たらんとする士に取つて、本書は經濟生活の羅針盤！ 八千萬國民は再須必讀せよ！

月刊

「マンガの日滿」漫畫と漫文の大雜誌

〔定價タヾの金十錢〕

東京・神田 仲町二ノ四十 漫畫時代社 振替東京69292番 電話谷下5118番

終

昭和八年十二月十六日印刷納本
昭和八年十二月二十一日發行

發行所
東京
漫畫時代社